

# 那珂65

– 那珂遺跡群第132次調査の報告 –

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1192集

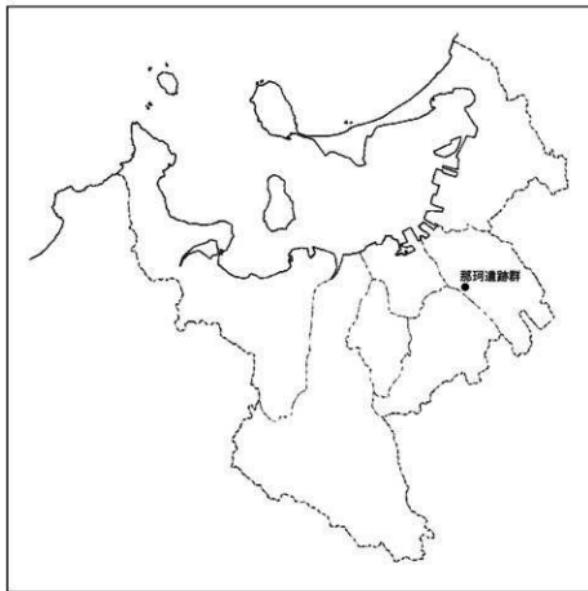
2013

福岡市教育委員会

# 那珂65

- 那珂遺跡群第132次調査の報告 -

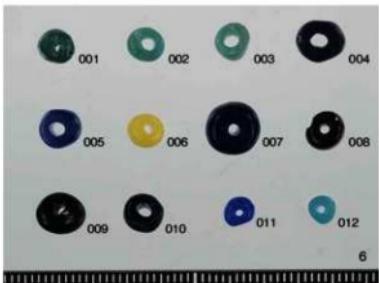
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1192集



遺跡名　NAK  
遺跡調査番号　1126

2013

福岡市教育委員会



1. 調査区全景（南西から）

2. SE113出土 椅子形木製品（第6図15）

3～5. SE164出土 墓書須恵器（第29図25・26・27）

6. SE150他出土 ガラス小玉（縮尺不同）

（※番号は第2表・第32図の番号に一致する）

# 序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さまに活用していただくために、文化財の保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市教育委員会では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、平成23年度に発掘調査を実施した、那珂遺跡群第132次調査の成果を報告するものです。本調査では、古墳時代を中心とする集落遺構が発見され、土師器・須恵器を中心とする多くの生活用具が出土しました。これらは、博多区の歴史を知る上で、貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さまの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者のみなさまをはじめとして、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成23年3月22日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例　言

1. 本書は、博多区東光寺町1丁目地内における共同住宅開発事業に先だって、福岡市教育委員会が平成23年度に発掘調査を実施した那珂遺跡第132次調査の調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は松尾奈緒子が行った。
3. 方位はすべて磁北であり、真北より $6^{\circ}40'$ 西偏している。  
また、座標は、日本測地系（第II系）を用いている。
4. 遺構は、竪穴住居をSC、掘立柱建物をSB、ピットをSP、井戸をSE、性格不明遺構をSXと略号化して記述した。
5. 本書に掲載した遺構の実測は藏富士寛・福蘭美由紀・松尾が、遺物の実測は大庭友子・松尾が、製図は米倉法子・松尾が、写真撮影は松尾が行った。
6. 附論として、福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵里（2012年9月現在）による出土ガラス小玉の分析を掲載している。巻頭図版-6および第32図は西澤が撮影した。
7. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて保管・公開される予定である。

## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
(1) 調査に至る経緯 .....	1
(2) 調査体制 .....	1
第2章 遺跡の立地と地理的歴史的環境 .....	2
第3章 発掘調査の記録 .....	4
(1) 調査の概要 .....	4
(2) 弥生時代の遺構と遺物 .....	4
(3) 古墳時代前期の遺構と遺物 .....	6
(4) 古墳時代後期の遺構と遺物 .....	14
(5) 古代の遺構と遺物 .....	24
(6) そのほかの出土遺物 .....	29
第4章 まとめ .....	30
府論 那珂132次調査出土ガラス小玉について（福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵里）…	31

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	第2図 周辺調査地点 (S=1/2,500)
第3図 調査区位置図 (S=1/1,000)	第4図 遺構配置図 (S=1/80)
第5図 SE113実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	第6図 SE113出土遺物実測図 (S=1/3)
第7図 SC97実測図 (S=1/20・1/40)	第8図 SC97出土遺物実測図 (S=1/3)
第9図 SC148実測図 (S=1/20・1/60)	第10図 SC148出土遺物実測図 (S=1/3)
第11図 SC169実測図 (S=1/20・1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	
第12図 SC166実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	第13図 SC167実測図 (S=1/40)
第14図 SC165実測図 (S=1/40)	第15図 SC165出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)
第16図 SC127実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	
第17図 SC128実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	
第18図 SC273実測図 (S=1/40)	第19図 SC96・98・116・122実測図 (S=1/40)
第20図 SC96・98・116・122出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	
第21図 SB291実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	
第22図 SD150土層実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	
第23図 SD168立面図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	第24図 SD162出土遺物実測図 (S=1/3)
第25図 SD162土層実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)	
第26図 SB292実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	
第27図 SB293実測図 (S=1/40)	
第28図 SE164実測図 (S=1/60)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	
第29図 SE164出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	第30図 SE164出土遺物実測図 (S=1/3)
第31図 そのほかの出土遺物実測図 (S=1/1・1/2・1/3)	
第32図 出土ガラス小玉顕微鏡写真（縮尺不同）	
第1表 玉類出土遺構一覧	第2表 出土ガラス小玉一覧

# 第1章 はじめに

## (1) 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成23年5月17日、共同住宅建設に先立ち、福岡市博多区東光寺町1丁目地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に照会文書が提出された（事前審査番号23-2-123）。埋蔵文化財第1課は、当該申請地が、周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群の範囲内に位置しており（分布地図番号37-38-0085・遺跡略号NAK）、土木工事が文化財に影響を与える可能性が大きいことから、申請者に対し、試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を経て、平成23年5月31日に試掘調査を実施し、地表下20cm～55cmにおいて、古墳時代から古代の遺構が存在することを確認した。これをうけて、埋蔵文化財第1課と申請者は、その取り扱いについて協議を行い、その結果、申請面積858.16m<sup>2</sup>のうち、共同住宅建設にともなう基礎工事によって遺構の破壊が免れない230.38m<sup>2</sup>について、平成23年に発掘調査、平成24年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が、平成23年7月4日から同年10月7日まで実施した（調査番号1113）。調査面積は255m<sup>2</sup>および、検出された古墳時代を中心とする集落遺構から、弥生土器・土師器・須恵器・弥生土器・木製品等のコンテナ42箱分の遺物が出土した。

## (2) 調査体制

調査を実施した平成23年度および整理報告を行った平成24年度の組織は以下の通りである。

調査主体：福岡市教育委員会

調査統括：（平成23年度）福岡市教育委員会 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫

調査第1係長 米倉秀紀

（平成24年度）福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗

調査第1係長 常松幹雄

調査庶務：（平成23年度）埋蔵文化財第1課 管理係 井上幸江

（平成24年度）埋蔵文化財審査課 管理係 川村啓子

事前審査：（平成23年度）埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下博文

（平成24年度）埋蔵文化財審査課 事前審査係 森本幹彦

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 松尾奈緒子（現 埋蔵文化財審査課事前審査係）

調査作業：岩本三重子 井本明憲（福岡大学） 太田智（福岡大学） 大庭智子 小野千佳

佐々木華子（福岡大学） 桑野孝子 草場恵子 田中ゆみ子 豊丸秀仁

水田政敏 水田ミヨ子

整理作業：松下伊都子 宮崎由美子 渡辺宏代 （五十音順・敬称略）

現地での発掘調査にあたっては調査委託者をはじめとして、関係者のみなさま、地域のみなさまからご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

## 第2章 遺跡の立地と地理的・歴史的環境

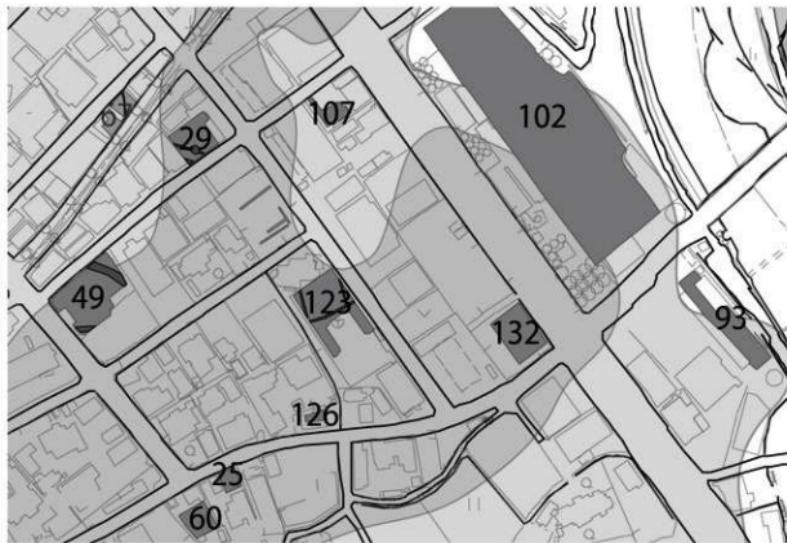
福岡平野は、那珂川・御笠川の沖積作用によって形成された低地のなかに、阿蘇山起源のAso-4火碎流によって形成された平坦な洪積台地が、河川解析をうけて島状に連なる沖積平野である。那珂遺跡群は、このような福岡平野の北部にあり、すぐ北側に隣接する比恵遺跡群とともに、東西約800m、南北約2400m、標高5m～10mをはかる細長い台地の上に立地している。

那珂・比恵遺跡群がひろがる台地の東・西には、御笠川・諸岡川と那珂川が北流する。西側は那珂川による氾濫原となっているが、御笠川のさらに東側にひろがる沖積低地では、弥生時代中期から古墳時代の生産遺跡である、東比恵三丁目遺跡や東那珂遺跡、那珂君体遺跡が立地する。一方、比恵遺跡群の北側は、低湿地を挟んで、中世の貿易都市として著名な博多遺跡群が展開する砂丘へとづく。また、南側は、鞍部を介して五十川遺跡が展開する台地に連なっており、五十川遺跡以南にも、奴国を中心地として評価の高い井尻B遺跡、須玖遺跡群などが展開する。

那珂遺跡群では2012年度末までに143次もの調査が行われ、拡大・縮小を繰り返しながら、弥生時代中期後半・弥生時代終末期～古墳時代前期・7世紀の各時期に盛期を迎える、福岡平野を代表する大規模遺跡であることがわかってきてている。最初のピークである弥生時代中期後半には、遺跡中央部を中心に、台地を東西に横断する大規模な区画溝や大型掘立柱建物、墳丘墓などの特殊な構造が確認されている（20・21・22・114次調査など）。さらに、弥生時代終末から古墳時代前期になると、台地を縱断する道路状構造と那珂八幡古墳を中軸とした、計画的な墓域・集落域の配置へと発展する（114次調査など）。このように「都市」とも評価される那珂遺跡群は、5世紀代に一度縮小するものの、6世紀中頃の東光寺剣塚古墳の造営を契機として、7世紀代に再び盛期を迎える。7世紀初頭には掘立柱建物群の計画的な配置がみられ、初期瓦の出土とあわせて、官衙関連施設の造営が推測されている。このような動きは7世紀中頃以降もつづき、大型掘立柱建物に加えて正方位の溝も多数発見され、那珂郡衙がおかれた可能性も指摘されている（22・23・37・68・114・115次調査など）。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 周辺調査地点 ( $S=1/2,500$ )

■高位部 ■低位部



第3図 調査区位置図 ( $S=1/1,000$ )

## 第3章 発掘調査の記録

### (1) 調査の概要 (第3・4図・巻頭図版)

本調査地点は、那珂遺跡群の北部東端に位置し、御笠川の氾濫原から台地中央部へむかって陥入する谷部に南北を挟まれた結果、半島状となった高位部に立地している。筑紫通りを挟んで東側で、官道東門ルートを検出した102次調査。西側では、中世の掘立柱建物・井戸・土坑、8世紀代の溝、古墳時代初頭の井戸等を検出した123次調査が行われており、本調査地点には、古墳時代・古代・中世を中心とする遺構が良好に依存している可能性が想定されてきた。2011年5月31日に行われた試掘調査では、調査区北側では耕作土直下G.L.-20cm、調査区南側では褐色土包含層の下G.L.-55cmで鳥栖ローム遺構面となり、古墳時代・古代の竪穴住居・土坑・溝等を確認している。

本調査地点の現況は畑で、現地表面の標高は6.8m前後である。試掘調査の結果を踏まえて、鳥栖ローム上面を遺構面と設定し、2011年7月4日から、重機による表土剥ぎを開始し、調査に着手した。調査区南半では、鳥栖ローム遺構面の上に褐色土包含層の堆積がみられたが、褐色土に含まれる遺物量と鳥栖ローム遺構面にのこる遺構の密度、調査期間を考慮したうえで、遺物の回収につとめながら重機によって除去することとした。鳥栖ローム遺構面の標高は6.3m～6.7mをはかり、北西から南東へゆるやかに傾斜している。調査区南端では、台地中央部へ向かって陥入する谷部の検出が予測されたが、調査区南端まで遺構が密に展開しており、南側の谷部は想定よりさらに南に位置すると考えられる。

鳥栖ローム遺構面では、弥生時代後期の井戸1基、古墳時代前期・古墳時代後期を中心とする竪穴住居14基、古墳時代後期の溝2条、古代の井戸1基、掘立柱建物3棟などのほかに、弥生時代～中世まで幅広い時期の柱穴や土坑などを多数検出した。柱穴・土坑の多くは検出面から0.5m～1.0m程度、竪穴住居も0.2m～0.5m程度の深さをもって遺存しており、遺構の残りは非常に良好であったと評価できる。これらの遺構を、3ヶ月をかけて調査し、2011年10月7日に調査を完了した。

### (2) 弥生時代の遺構と遺物

#### SE113 (第5・6図)

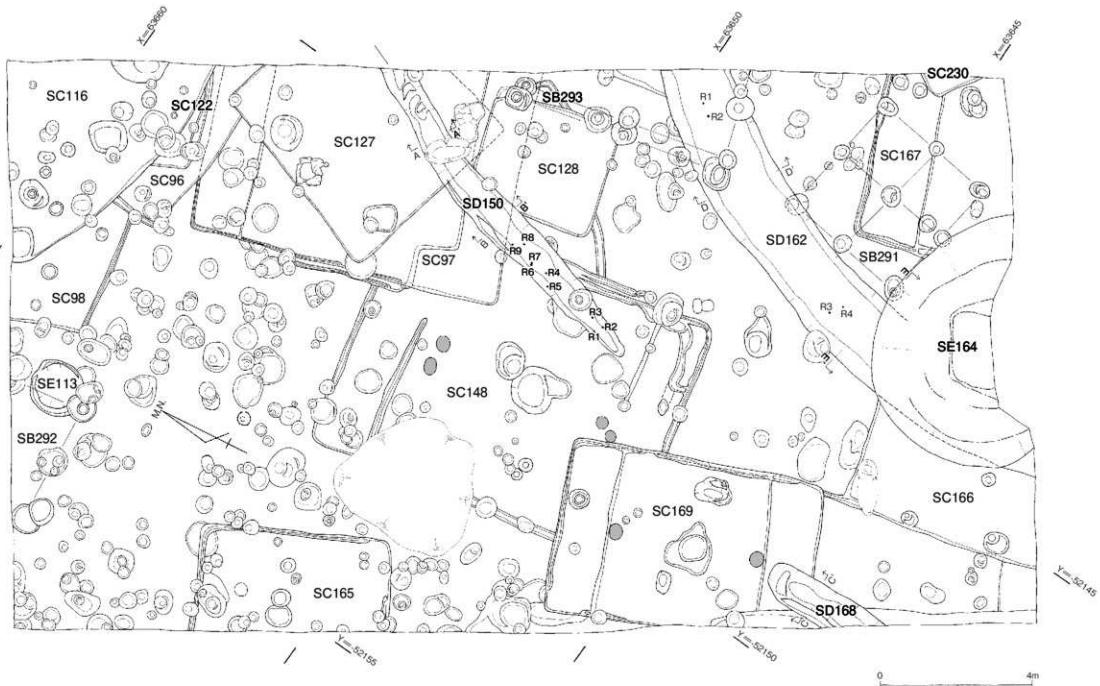
調査区北側中央部で検出した、平面円形の井戸である。直径は約1.1m、検出面から深さ約2.85mで底となる。検出面の標高は6.5m、底面の標高は3.8mをはかる。鳥栖ロームから八女粘土に変化するあたりを底とし、検出面から1.8m前後のところから下の壁面は崩落していた。

覆土は、黒褐色粘質土を主体とし、検出面から1m以下は、黒褐色粘質土と黒褐色砂礫混土、ロームブロックが互層となって堆積していた。検出面から2mの深さで、投棄されたR1・R2・R4および椅子形木製品、加工痕跡のない木片等が集中して出土した(図5-1・2・4、図6-15)。R3(図5-3)のみ底面直上から出土している。また、出土遺物には、上層と下層から出土した破片が接合するものが多く、SE113が発掘時に一度に埋められたことがうかがえる。

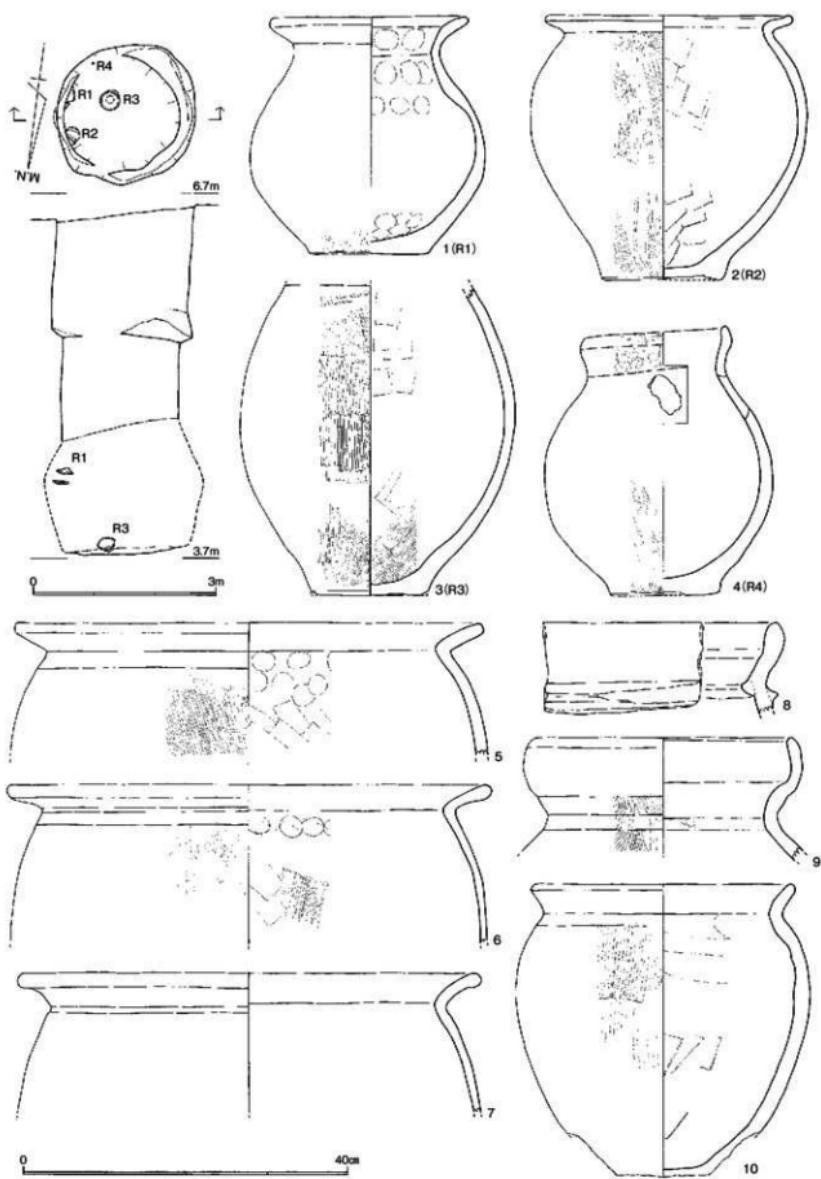
出土遺物から、弥生時代後期前半の井戸であると考えられる。

#### [出土遺物 (第5・6図・巻頭図版2)]

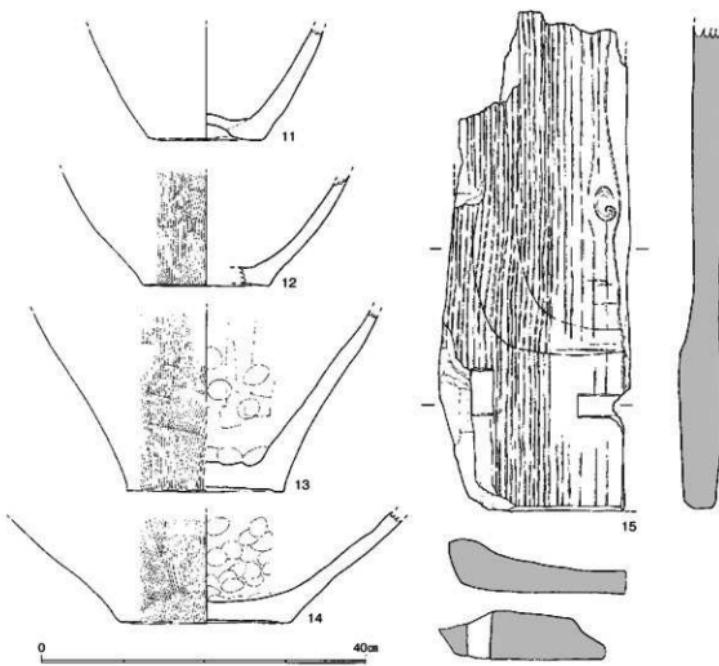
1(R1)・3(R3)・4(R4)は弥生土器壺、2(R2)は弥生土器甕である。1～4は完形ではなく、口縁部が欠損しているものが多い。4は焼成後に頸部に1ヶ所穿孔している。8の甕は中期末のものである。10の甕は胴部下半から底部にかけて被熱による剥離が著しい。15は針葉樹材でつくられた椅



第4図 遺構配置図 (S=1/80)



第5図 SE113実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)



第6図 SE113出土遺物実測図 (S=1/3)

子形木製品である（巻頭図版-2）。厚さ2.8cmの材の中央部をけずって底面としたと考えられるが、工具の痕跡などは摩滅によりわずかに残るだけである。組み合わせる際に使用したと考えられるほど穴が2箇所もうけられている。

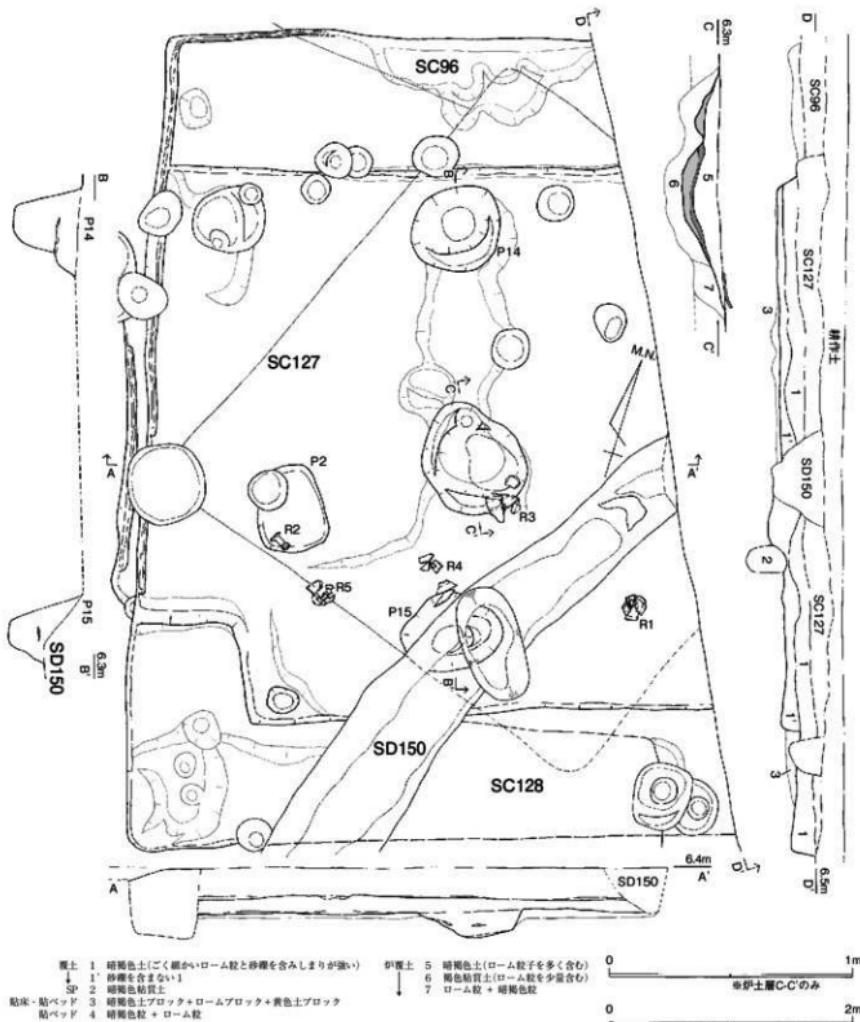
### (3) 古墳時代前期の遺構と遺物

#### SC97（第7図・図版1-1）

調査区西側に位置する堅穴住居である。検出面の標高は最も高いところで6.6mをはかる。主軸をほぼ北西-南東方向にとり、長軸6.65m、短軸5m以上の長方形をなす。中央部をSC127に、南辺をSC128とSD150に、北辺をSC96にきられ、北隅と東隅は調査区外へと続く。覆土は、ローム粒と砂礫を含む暗褐色土を主体とする。

北側と南側の短辺に、ローム粒を含む暗褐色土で成形された幅約1.1mのベッド状遺構をもち、南側のベッド状遺構は南隅で折れ曲がり西側長辺にまで伸びる。検出面からベッド状遺構までの深さは0.24m、貼床面までの深さは0.38mをはかり、ベッド状遺構と貼床面の比高差は約0.14mである。主柱は、位置と柱穴の規模・形態の類似から、南側と北側の短辺側に確認されたP-14・15の2本と考えられる。

主柱穴は直径約0.7mの不整円形をなし、柱間距離は3.4mをはかる。深さ約0.6m掘削して柱を設置した後に、ロームブロックと暗褐色土ブロックの混合土で床面を整地したようである。これらの主柱穴のはば中央に炉が設置されている。壁溝は、西辺と北辺の一部で、貼床・ベッド状造構の上面から掘



第7図 SC97実測図 (S=1/20・1/40)

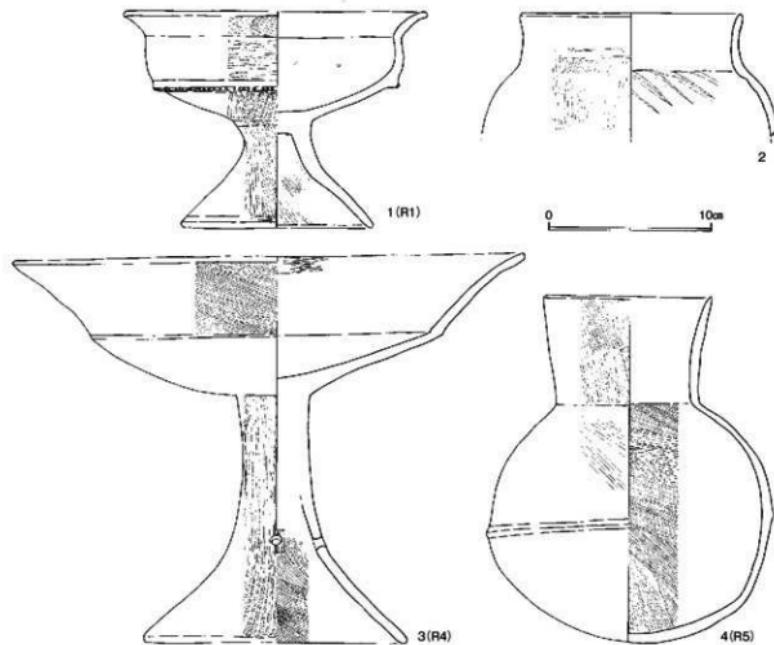
削されていた。幅0.1m～0.15m、検出面からの深さは0.1mをはかり、断面形は幅の狭いU字形またはV字形をなす。

なお、SC97の西側にはSC97の西側長辺に併行するように、住居にともなう壁溝とおもわれる溝が検出されたが、この溝とSC97との新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居と考えられる。

#### 【出土遺物（第8図）】

R1～R5は貼床上面で出土した。このうち依存状況の良いR1・R4・R5を図示した。R2は高坏脚部片、R3は高坏坏部片である。1（R1）の高坏は肥前系のもので、直立してつぶれた状態で出土した。坏部の屈曲部分に刻目突帯をめぐらしている。赤味のある黄褐色を呈し、胎土は精良である。2は内面をヘラケズする甕で、3（R4）は脚部に2箇所円形透かしをもつ高坏。坏部内面は摩滅しているがヘラミガキの痕跡がわずかに観察できる。4（R5）の直口甕の胴部は若干ひずんでいる。黄褐色を呈する。



第8図 SC97出土遺物実測図 (S=1/3)

#### SC148（第9図・図版1～2）

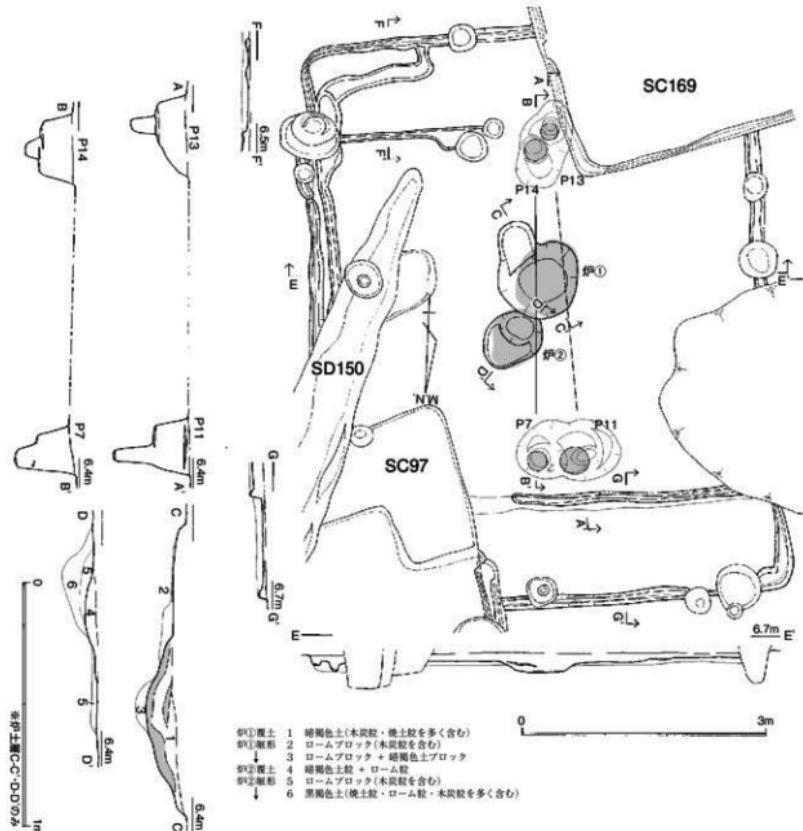
調査区中央部に位置する竪穴住居である。主軸をほぼ南北方向にとり、長軸7.2m、短軸5.4mの長方形をなす。検出面の標高は6.4m～6.5mをはかる。削平がすんでおり覆土はほとんど残っておらず、南側半分では壁溝しか残存していない状況であった。主軸を同じくするSC97・SC169に北東隅・南西

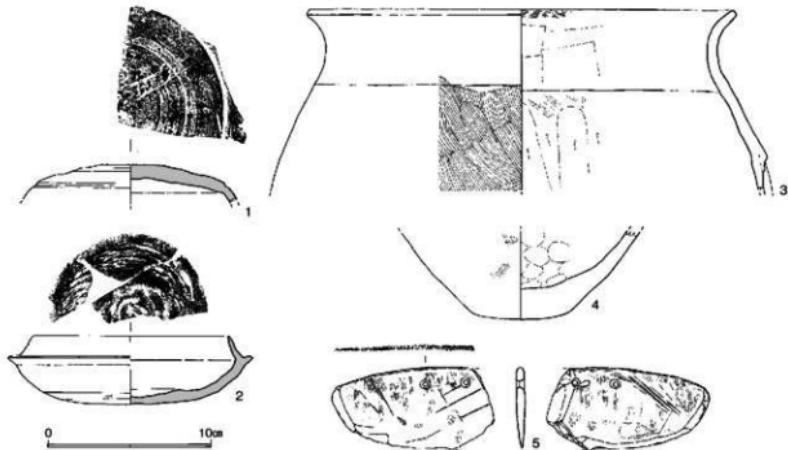
隅をきられる。主柱穴、炉、壁溝が重複することから、立て替えがあったと考えられる。

南側と北側の短辺に、ローム粒を含む暗褐色土で整形された幅約1.25mのベッド状遺構を備えており、幅0.1m～0.2m、検出面からの深さ0.1m～0.2mをはかる断面U字形の壁溝が、住居外周とベッド状遺構の周囲をめぐっている。ベッド状遺構と貼床面の比高差は約0.1mである。主柱は2本柱で、短辺側に重複して確認されたP11・P13・P7・P14と考えられる。新旧関係を明らかにできなかつたため、下図に示した主柱穴の組み合わせは想定である。主柱穴は直径約0.6m～0.9mの不整円形をなし、柱間距離は約3.9mをはかる。深さ0.6m～0.9m程度掘削し柱をたて、ロームブロックを多く含む暗褐色土で貼床をほどこしている。炉は主柱穴の間に設けられ、炉①が炉②よりも新しい。

#### 〔出土遺物（第10図）〕

1・2はSC148検出面で出土した須恵器壺蓋・壺身である。1は天井部外面にヘラ記号を有する。





第10図 SC148出土遺物実測図 (S=1/3)

3は把手のつく甌または壺である。内面は縦方向のケズリ、外面は下から上へのハケ調整で仕上げられる。4は底部が凸レンズ状となる甌。外面にスヌが付着する。5は石包丁。凝灰岩製か。3～5はすべてSC148の床面付近から出土している。

#### SC169（第11図・図版1-3）

調査区南西部に位置する堅穴住居である。主軸をほぼ北西-南東方向にとり、長軸5.5m、短軸3.8mの長方形をなす。南隅のみ調査区外へと続き、南側の一部をSD168にきられる。検出面の標高は6.45mをはかる。覆土は、ローム粒と砂礫を少量含むしまりの強い暗褐色土を主体とし、床面に近いほどロームブロックが多く含み粘性が強くなる。

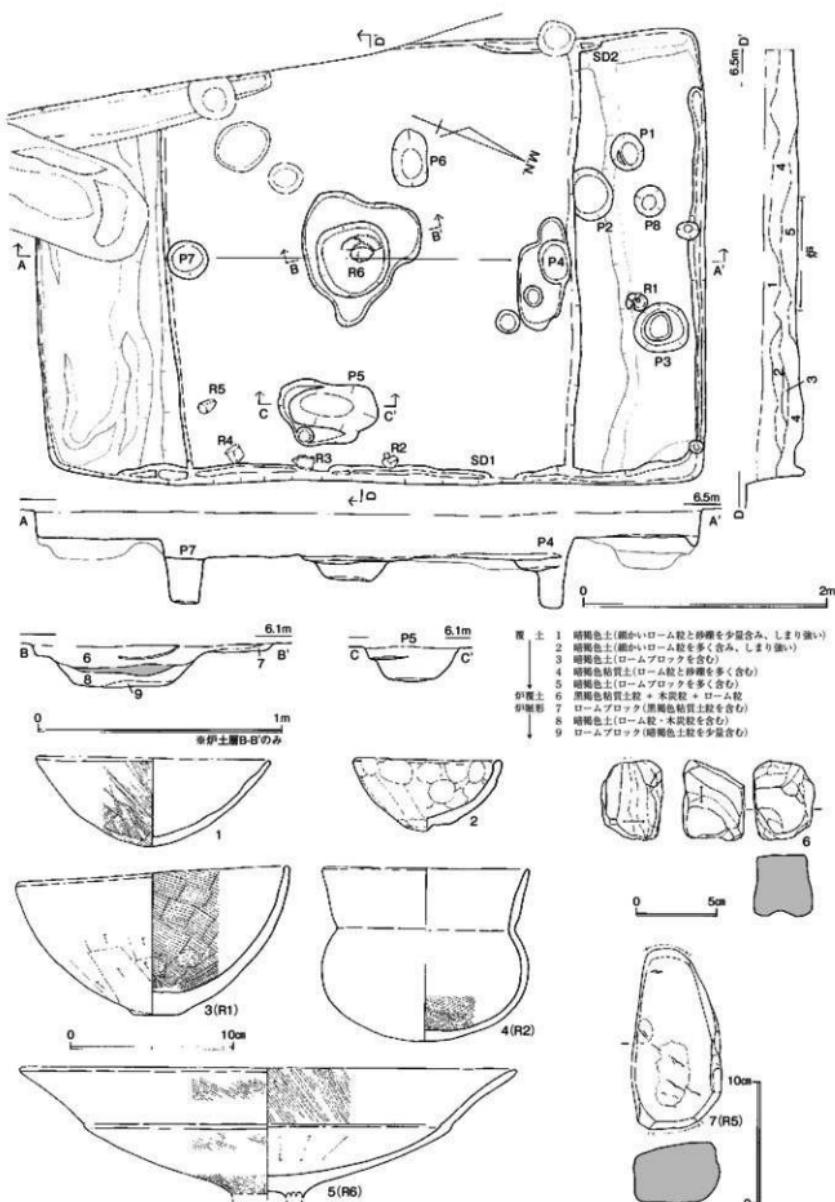
北側と南側の短辺に、ロームブロックを多く含む暗褐色土で成形された幅約1.1mのベッド状遺構を設けている。検出面からベッド状遺構までの深さは0.2m～0.25m、床面までの深さは0.38mをはかり、ベッド状遺構と床面の比高差は約0.15mである。床面は、SC97やSC148と異なり、整地されていない。壁溝は、住居北側を中心で検出され、幅約0.1m、検出面からの深さ0.1mをはかり、断面形はV字形またはU字形をなす。主柱は短辺側に確認されたP4およびP7と考えられる。主柱穴は直径約0.4mの円形もしくは梢円形をなし、柱間距離は約3.1mをはかる。深さ0.4m程度掘削してから柱をたてている。主柱穴の間にほぼ径0.9mをはかる不整形の炉が設けられ、東壁中央部には壁際土坑P5が、配置されている。

出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭の堅穴住居と考えられる。

#### 〔出土遺物（第11図）〕

1・2は覆土下層から出土した鉢である。1の外面は擦痕のような工具によるナデで仕上げられ、内面にも同様の痕跡がみられる。3・4・7はR1・R2・R5で、床面直上で出土した。4は摩滅がすんでいるが、底部内面には逆時計周りのハケ調整がのこる。7は838.84gをはかる磨石で、上端と下端に使用痕が観察できる。5は炉の覆土から出土した高坏である。坏部内面には放射状にヘラミガキがほどこされている。6は砂岩製砥石で、2面に溝状の使用痕がのこる。

第11図に示した土器の胎土は黄褐色を呈し、砂粒を含むもので、すべて共通している。



第11図 SC169実測図 (S=1/20・1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

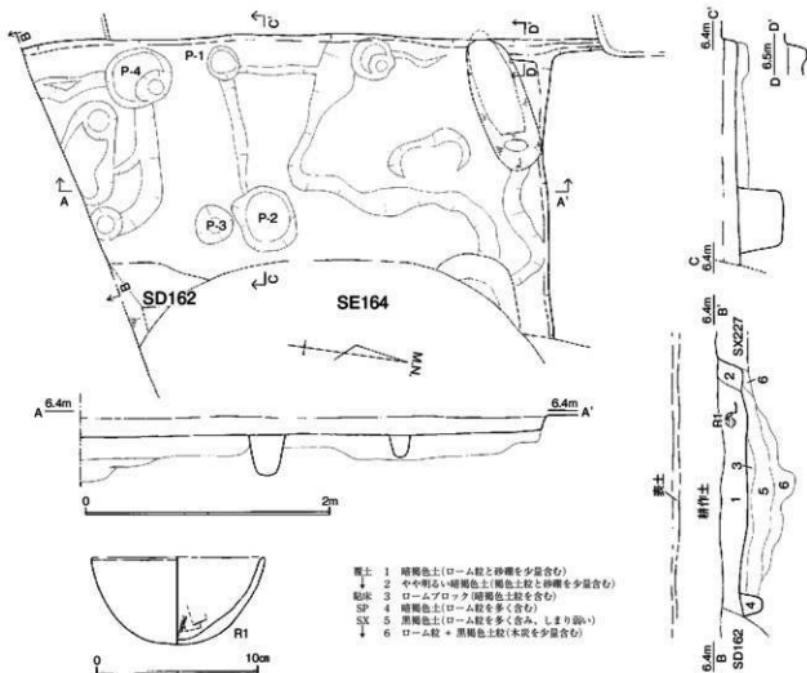
### SC166 (第12図)

調査区南西隅で検出した、主軸をほぼ南北にとる方形の堅穴住居である。住居南側は調査区外へと続き、中央部もSE164にきられているため、正確な規模・形態は不明である。検出面の標高は6.35mをはかり、長軸3.8m以上、短軸2.4m以上を検出した。覆土は、ローム粒と砂礫を含む暗褐色土を主体とし、床面は厚さ暗褐色土粒を含むロームブロックにより整地されている。住居南側の貼床は層厚0.3m程度と厚くなつておらず（土層5・6）、住居より古い別の遺構である可能性もある。

検出面から貼床上面までの深さは0.15m～0.25m程度である。当初、ベッド状遺構はないと考えたが、住居北西側で幅0.15m、深さ0.16mをはかる断面台形の壁溝が検出され、その延長が住居外の北側へ続くことから、北側に地山削りだしのベッド状遺構をもつ可能性がある。主柱穴と炉は検出されなかつた。

#### 【出土遺物（第12図）】

R1は調査区南壁のSC166覆土から出土した鉢である。口縁部の大部分は失われ、摩滅著しい。



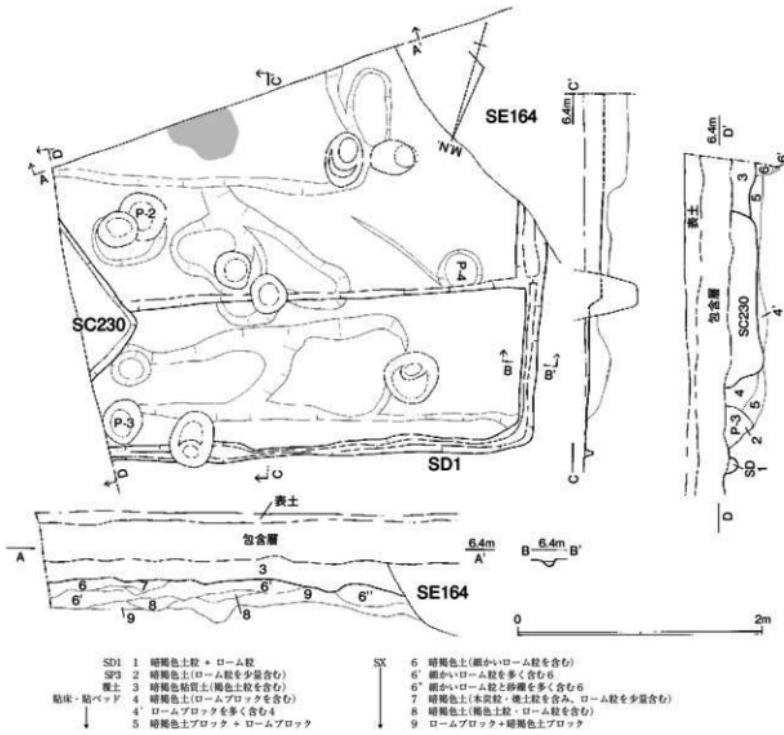
第12図 SC166実測図 (S=1/40) ・出土遺物実測図 (S=1/3)

### SC167 (第9図・図版2-2)

調査区南東隅で検出した、主軸を北西～南東にとる方形の堅穴住居である。住居南側の大半は調査区外へと続き、東側はSC230に、西側はSE164にきられているため、正確な規模・形態は不明である。

検出面の標高は6.3mをはかり、長軸1.7m以上、短軸3.8m以上を検出した。削平がすんでおり、検出面において、住居北側に幅1.3mをはかるベッド状遺構が存在することを確認できた。覆土は、褐色土粒を含む暗褐色粘質土を主体とし、床面およびベッド状遺構は、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土により整形されている。住居南側の貼り床は層厚0.25m程度と厚くなっている。SC167の下面に古い遺構がある可能性も考えられる（土層6～8）。

検出面から貼床上面までの深さは0.18mをはかる。壁溝は、住居の外周部で検出され、幅約0.06m～0.22m、深さ0.15mをはかり、断面形はV字形またはU字形をなす。主柱穴と炉は検出されなかった。出土遺物は弥生土器・土師器を中心であるが、いずれも細片のため図化し得ない。



#### SC165（第14図・図版2-1）

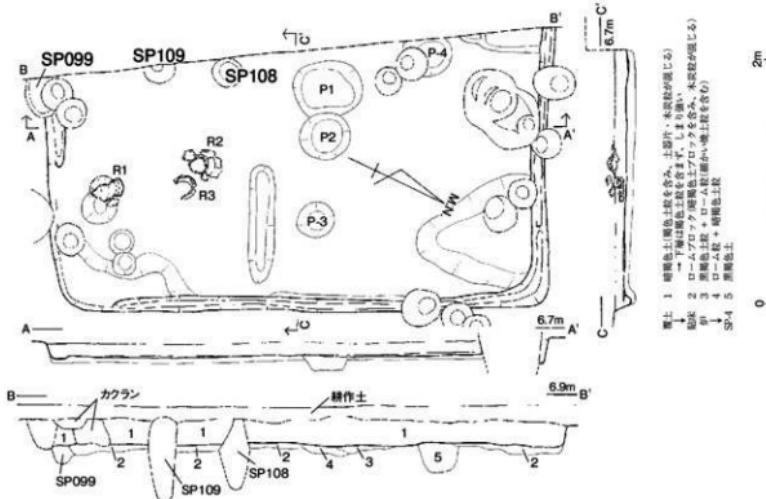
調査区中央部西側で検出した、方形の竪穴住居である。住居西側が調査区外へと続くため、正確な規模・形態は不明である。検出面の標高は6.6mをはかり、東側辺4m、北側辺2.2m以上を検出した。覆土は、褐色土粒・木炭粒を含む暗褐色土を主体とし、床面は、暗褐色土粒・木炭粒を含むロームブロックで整地されている。検出面から貼床上面までの深さは、約0.2mをはかる。

住居東隅をのぞいた外周部に、幅0.12m～0.2m、深さ0.06mから0.1m程度の壁溝が検出された。東辺中央部では、壁溝が貼床後と貼床前で重複して検出されたことから、壁溝に構造物をたてた後に床を貼った可能性が推測される。主柱穴は不明であるが、住居の中央部、調査区西壁沿いで、焼土の集中部が検出されている。

出土遺物から古墳時代前期中頃の竪穴住居であると考えられる。

#### 【出土遺物（第14図）】

1 (R3)・2 (R2)・3 (R1) は床面から若干浮いた状態で出土している。1・2は土器壺で、砂粒を含む淡褐色を呈する。1の内面にはヘラケズリの痕跡がみられる。2は布留系壺で、内外面にスス・コゲが残る。3は支脚。摩滅が著しく調整は不明である。赤褐色を呈する。4・5は土器壺である。4の口縁部内面のヘラミガキが残る部分は黒色を呈し、塗られていた可能性もある。6～8は須恵器壺蓋・坏身である。6・8はP1より出土した。上面で検出できなかった遺構に属するもので、混じり込みの可能性が高い。10～12は弥生土器壺。すべて胎土には砂粒が多量に含まれ、黄褐色を呈する。



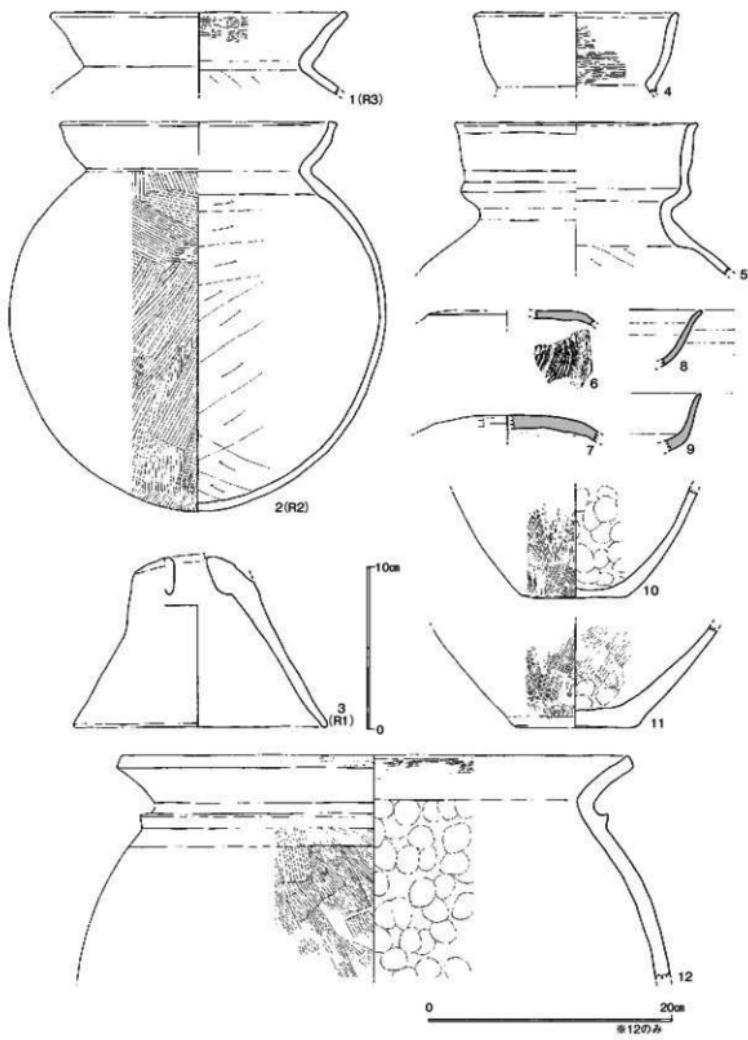
第14図 SC165実測図 (S=1/40)

#### (4) 古墳時代後期の遺構と遺物

##### ① 竪穴住居

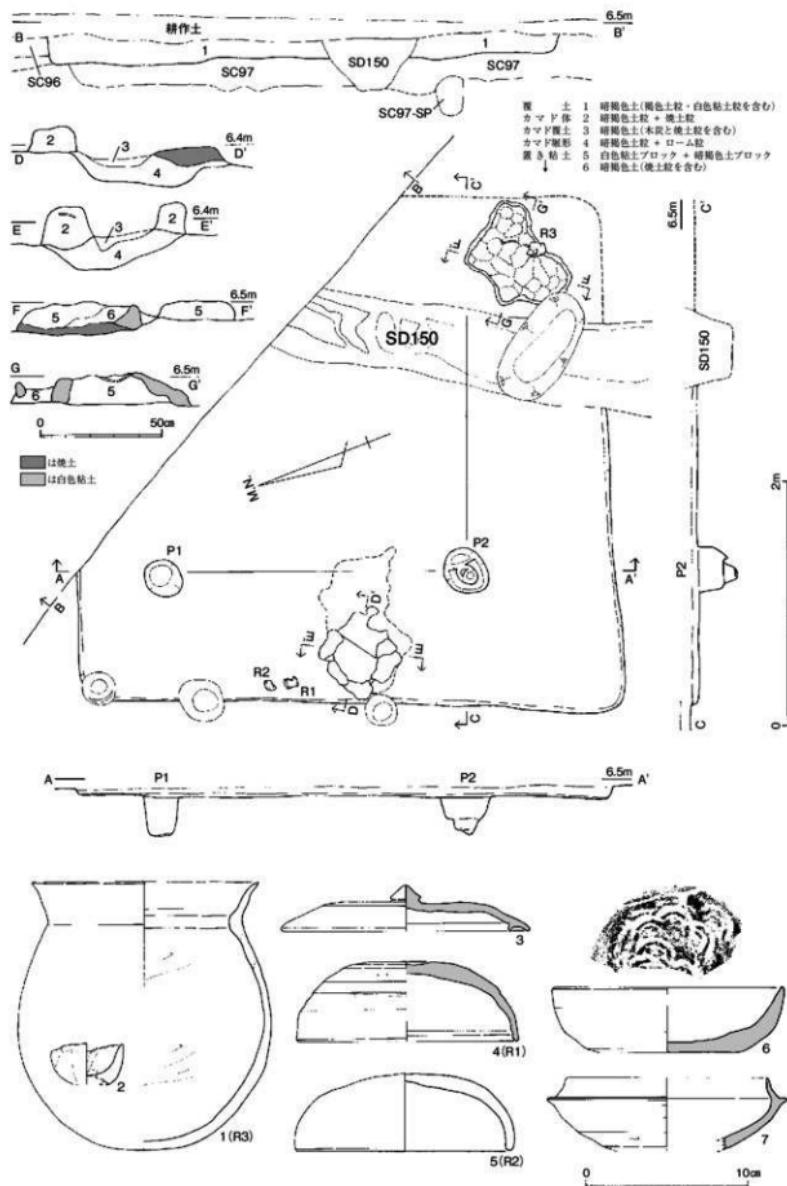
###### SC127 (第16図・図版1-1・3-1・2)

調査区中央部東側で検出した、一辺4.2m～4.4mをはかる正方形の竪穴住居である。古墳時代初頭の住居SC97・96の廃絶後に営まれ、SD150・SC128に東側をきられる。南隅に、暗褐色土ブロックを少量含む白色の置き粘土、北西辺の中央に、褐色土粒・白色粘土粒を含む暗褐色土を体部とするカマドを配置する。カマドの東側には図示した範囲に焼土が広がっていた。標高6.55m前後でカマドと置

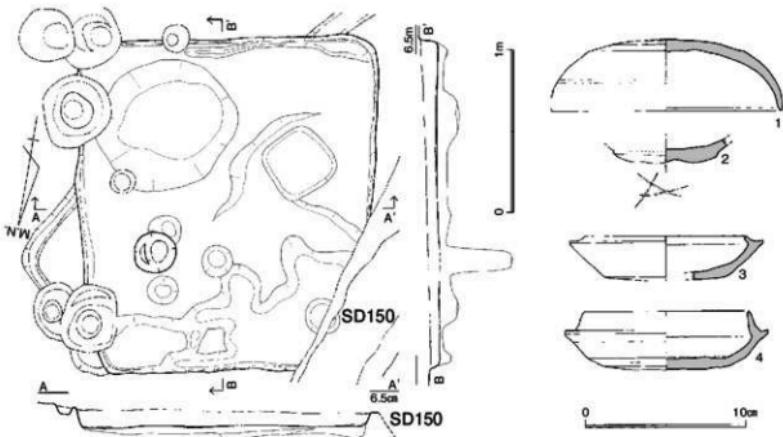


第15図 SC165出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

粘土を検出したが、SC97との関係を把握できなかつたため、実際にSC127の平面プランを検出したのは、標高6.4m前後である。また、南隅の正確な形態は、平面的に確認することができず、調査区東壁土層の検討から推定している。覆土は褐色土粒・白色粘土粒を含む暗褐色土を主体とする。主柱は4本であったと考えられ、このうちP1・P2の2本を検出した。柱穴の平面形は直径0.35mをはかる円形で、



第16図 SC127実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 SC128実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

床面からの深さは0.3m程度である。SC97の覆土を床面とするため、検出できていない可能性もあるが、貼床も壁溝もないと考えられる。

出土遺物R1・R2・R3から古墳時代後期中頃の竪穴住居と考えられる。

#### 【出土遺物（第16図）】

1はR3で白色置き粘土中から、4・5はR1・R2でカマドの北側で床面直上から出土した。1の胴部外面にはわずかに縦ハケが残る。5は摩滅が著しく調整は不明。2・3・6・7は覆土上層から出土した。混入と考えられる。3・6・7は7世紀代の須恵器である。6は焼成が甘く灰白色を呈する。

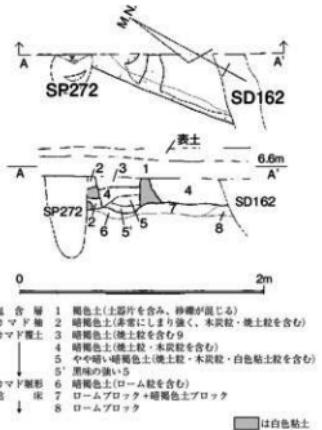
#### SC128（第17図・図版4-1）

SC127の南側で検出した、一辺2.4m～2.8mをはかる略正方形の竪穴住居である。SC127の廃絶後に営まれ、西隅をSD150に、東辺を古代の柱穴にきられる。標高面の標高は6.45mをはかる。覆土は褐色土粒と砂礫を多く含むしまりの強い暗褐色土を主体とする。検出面から0.1m～0.15mの深さで、暗褐色土粒を多量に含むロームブロックで整地した床面となる。貼床の厚さは0.15m程度である。贴床上面において炉またはカマドも検出されず、壁溝も確認されなかった。また、複数の柱穴を検出したが主柱穴として把握することはできなかった。

古墳時代後期中頃～後半の竪穴住居と考えられる。

#### 【出土遺物（第17図）】

1・4は上層、2・3は下層から出土した。すべて須恵器である。2は坏身として実測したが、坏蓋の可能性もある。外底部は粗い静止ナデで調整された後、ヘラ記号がほどこされる。3の焼成は甘く灰黄色を呈



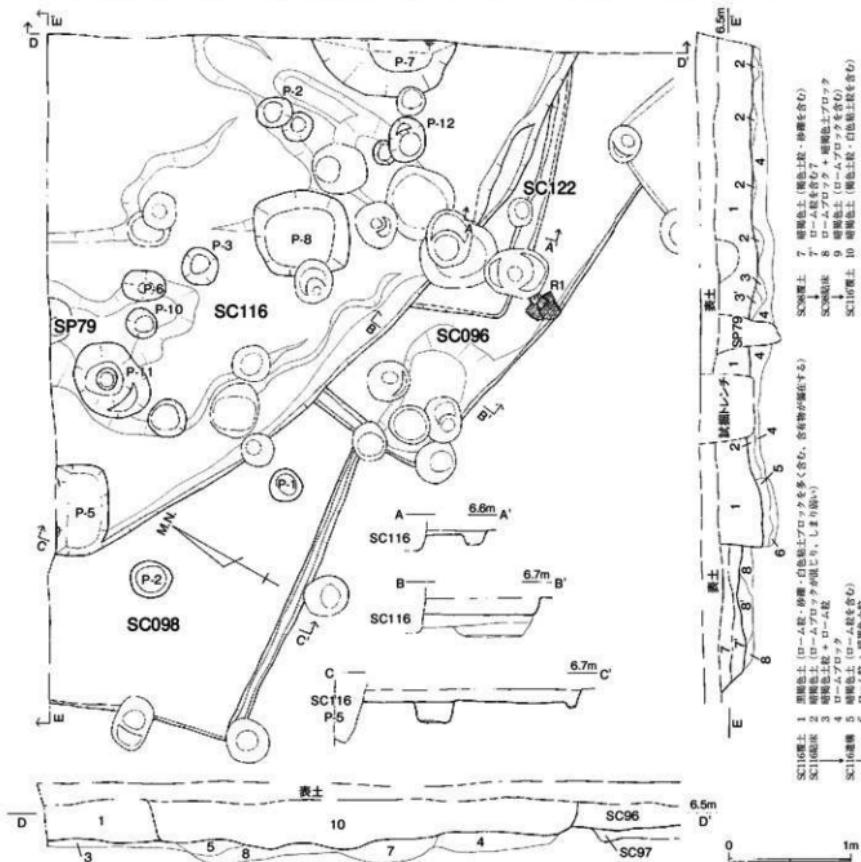
第18図 SC273実測図 (S=1/40)

する。4の内底面は回転ナデの後静止ナデで仕上げられている。

### SC273 (第18図)

SC128の南側で検出した、方形の堅穴住居である。検出面の標高は6.5m前後をはかる。堅穴住居の大半が調査区外へと続き、SP272とSD162にきられるため、わずかに西辺を12m検出したにとどまる。検出した西辺に、白色粘土ブロックと暗褐色土ブロックの混合土を体とするカマドを設けており、袖と袖の間の壁はやや膨らみ突出している。覆土は焼土粒・木炭粒を含む暗褐色土を主体とし、検出面から約0.25mの深さで、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土の貼床となる。

出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器などが出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。



**SC96・98・116・122 (第19図・図版2-3)**

調査区北隅で検出した堅穴住居群である。検出面の標高は6.6m前後である。平面でのプラン確認と土層の検討を繰り返し、SC98、SC96、SC122、SC116の順に次々と堅穴住居が営まれたと考えたが、切りあいが激しく、ここで報告する4つの住居の形態・新旧関係は正確でない可能性がある。

SC96・SC98・SC122はすべて方形の堅穴住居である。SC98は南西隅のみを検出し、1辺の長さは1.5m～2.8m以上をはかる。覆土は褐色土粒と砂礫を含む暗褐色土を主体とし、検出面から約0.2mの深さで、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土の貼床となる。南辺で、幅約0.12m、深さ0.05mをはかる断面台形の壁溝を検出した。SC96は、SC97の廃絶後に掘削されており、住居の南側のみ検出した。南辺の検出長は4.4mをはかる。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とし、検出面から約0.25mでロームブロックを含む暗褐色土の貼床となる。貼床上面でR1が出土した。西辺で幅0.12m、深さ0.1m、断面台形の壁溝を確認した。同様に、SC122も南隅のみ検出した。ロームブロックと砂礫を含む暗褐色土を覆土とする。SC96の覆土を検出面とするため、床面の認識が不明確ではあるが、検出面から0.1m程度の深さで床面となり、南辺で幅0.15m、深さ0.1m、断面台形の壁溝を検出した。



第20図 SC96・98・116・122出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

SC166は平面形が明らかでない竪穴住居である。複数の住居がきりあっている可能性もある。南辺の検出長は6mをはかるが、直線でなく湾曲している。覆土は白色粘土ブロックと砂礫を含む暗褐色土を主体とし、検出面から約0.32mの深さで、暗褐色土粒を含むロームブロックの貼床となる。貼床上面で壁溝やカマドは確認されず、柱穴P1～P7も主柱穴として把握することはできなかった。

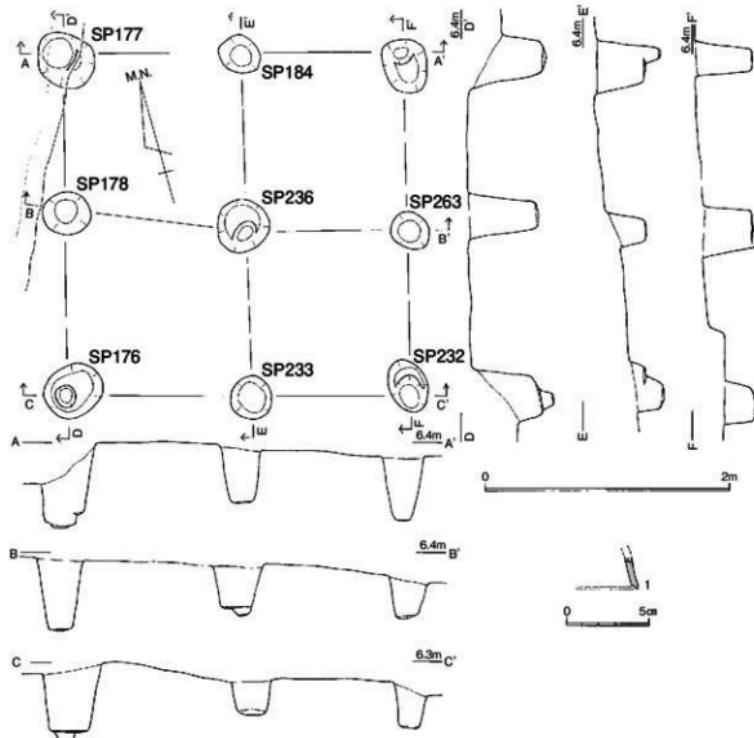
#### [出土遺物 (第20図)]

1はSC122貼床から出土した。土器壺の口縁部か。2・3・4はSC96から出土した。2は第20図に示したR1である。2・3ともに弥生時代終末期のものか。4の須恵器壺身は外底部にヘラ記号を有する。5はSC98から出土した須恵器壺身である。6～10はSC116から出土した。6は古式土器鉢、8は145gをはかる滑石製石錘、9は砂岩製砥石である。7の須恵器壺身と10の不明鉄製品はともに貼床から出土した。

#### (2) 挖立柱建物

##### SB291 (第21図・図版2-2)

調査区南東隅に位置する、2間×2間の掘立柱建物である。主軸を北東-南西にとる。建物東側の



第21図 SB291実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

一部はSE164にきられる。覆土はローム粒を含む暗褐色土で、柱痕跡等は検出できなかった。

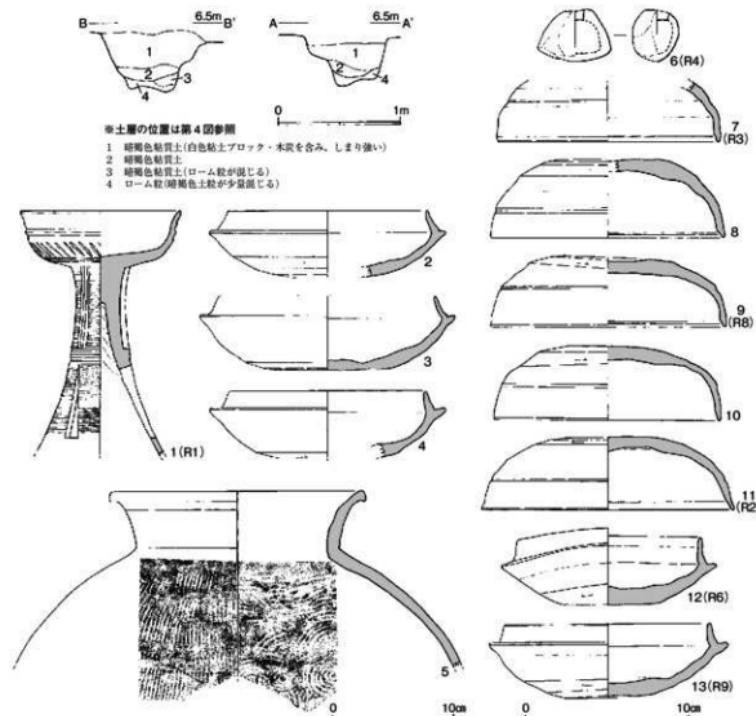
柱穴は直径0.25m ~ 0.35mの不整円形プランをなし、検出面から0.25m ~ 0.7m残存する。柱穴の底面の標高は5.6m ~ 5.7mでおおむねそろう。柱間距離は1.32m ~ 1.48mで、桁行と梁行でとくに差異はない。

〔出土遺物（第21図）〕 1はSP177から出土した。須恵器坏蓋であれば、6世紀代のものであろう。

### ③ 溝

#### SD150・SD168（第4・22・23図・国版3-3・4-1）

調査区中央部を北東から南西方向に円を描いて横切る溝である。SC97・127・128・148・169等を破壊して掘削されている。検出長は、それぞれSD150は8m、SD168は2.4mをはかる。標高6.4m前後で検出し、検出面における幅は0.7m ~ 0.88m、断面形は底辺の短い台形をなす。検出面からの深さは最大0.5m程度である。覆土は、白色粘土ブロック・木炭粒を含む暗褐色粘質土を主体とする（第22図土層1・2）。ここから第4・22図に示したR1 ~ R9が、底面からういた状態で出土している。おそらく、SD150の覆土とそこから出土した遺物は、SD150の壁面となっていたであろうSC127・128・237等に由来するものであると考えられる。



第22図 SD150土層実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

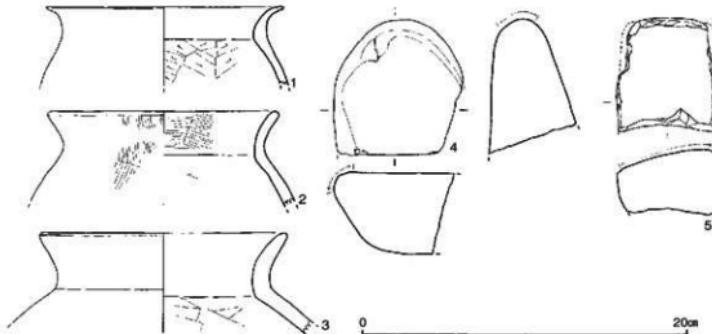
SD150は、底面が徐々に浅くなり調査区中央部で途切れるが、その延長線上にSD168が続くことから、SD150とSD168は同一の溝と考えられる。また、SD162とは3m～4mの距離を保って並行する可能性がある。

#### [出土遺物 (第22・23図・図版4)]

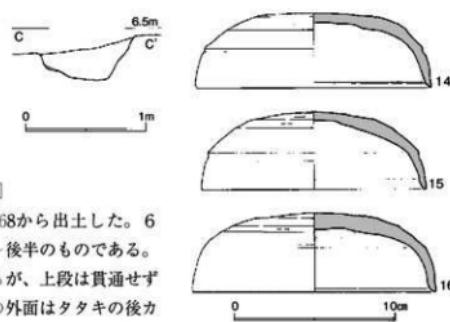
1～13はSD150から、14～16はSD168から出土した。6をのぞきすべて須恵器で、6世紀中頃～後半のものである。1の無蓋高杯は3箇所に透かしを有するが、上段は貫通せず構状になっている。5の壺の胴部上半の外表面はタタキの後カキメがほどこされる。焼成がやや甘く灰白色を呈する。6は皮袋を模した須恵器をミニチュアにしたような形態の土製品である。胎土には石英粒が含まれ、淡黄褐色を呈する。2～4・12・13は壺身である。2の内底部には当て具痕がのこり、12の内底部は回転ナデの後静止ナデ調整される。7～11・14～16は壺蓋である。7の焼成は甘く白灰色を呈する。8・9・11の天井部内面は回転ナデの後静止ナデ調整される。16は焼成が甘く灰白色を呈する。SC169上層から出土したものと接合した。このほかにSD150からガラス小玉が出土しているが、詳細は附編を参照されたい。

#### SD162 (第4・25図・図版2-2)

調査区南半を、北東から南西方向に円を描いて横切る溝である。SC237等を破壊して掘削されており、SD150と3m～4mの距離を保って並行する。調査区南端ではSE164にきられる。検出長は7.2mをはかる。標高6.3m～6.4mで検出し、検出面における幅は約1.6m、断面形は底辺がやや長い台形をなす。検出面からの深さは最大で0.44mをはかり、底面の標高は南西ほどやや低くなる。覆土は、白色粘土・木炭・焼土粒を含む暗褐色粘質土（第25図土層1）と、しまりの強い暗褐色粘質土（第25図土層2・3）に分けられる。土層1からは、第4・23図に示したR1～R4ほか多くの遺物が、底面からういたい状態で出土している。これらは、SD162の壁面となっていたであろうSC237等の6世紀代の竪穴住居に由来するものであろう。また、土層1に含まれる白色粘土が北側から流れ込んでいることから、SD162下層は北側から埋没していたと考えられる。

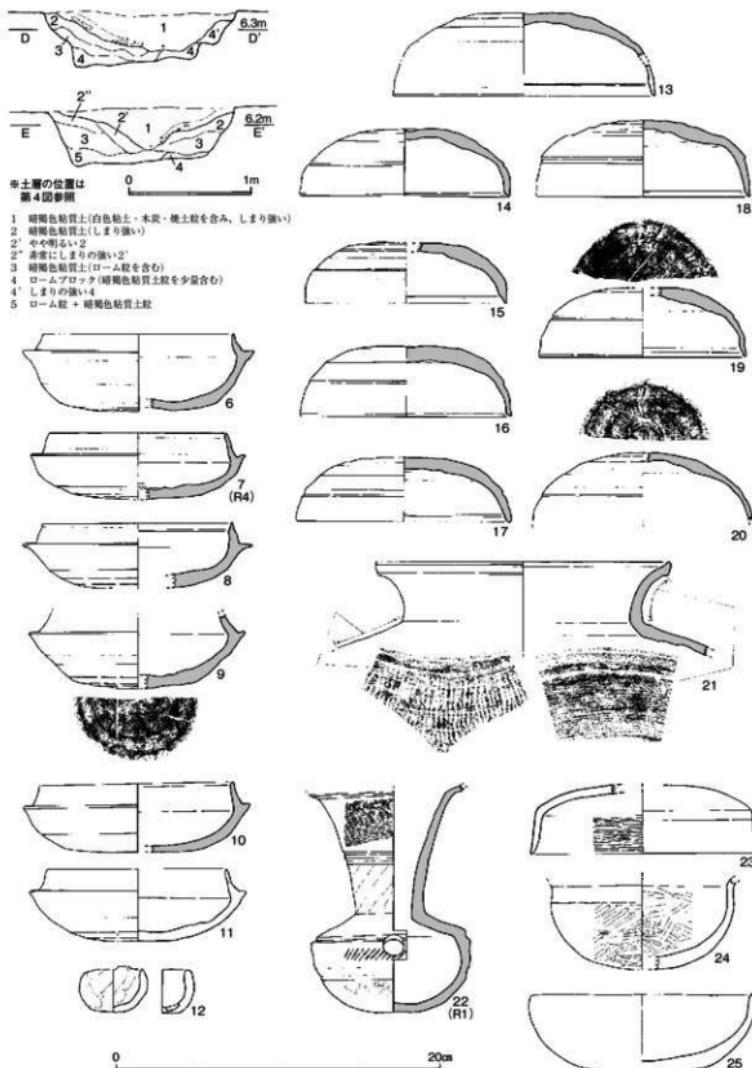


第24図 SD162出土遺物実測図 (S=1/3)



第23図 SD168立面図 (S=1/40)  
出土遺物実測図 (S=1/3)

SD150・SD168・SD162は平行して円弧を描いており、復元するとSD162は直径12mの円を描くことになる。円墳の周濠であるとの指摘もうけたが、SD162土層からは円弧外部からの流土により埋没を開始したことがわかっている。覆土から流水はないことは確実であるが、性格は不明である。



第25図 SD162土層実測図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

〔出土遺物（第24・25図）〕

1～3は土師器壺である。摩滅が著しく、調整は胴部上半内面のヘラケズリ程度しか観察できない。2は内外面にスス・コゲが付着する。4は磨石で上面中央部はわずかに凹む。5は砂岩製砥石である。明確な砥面は図示した1面のみであるが、側面にも掠痕が観察できる。粗研ぎに使用したのか。6～11は須恵器坏身である。7は第4図に図示したR4。9の外底面はヘラ記号を有する。内底面は回転横ナデの後静止ナデで仕上げられる。10は焼成が甘く、淡黄褐色を呈する。11の内底面にはわずかに当て具痕跡がのこる。12はミニチュアの手捏ね鉢で、内底面に穿孔途中でとめたような凹みを有する。胎土には小礫が含まれ、灰黄色を呈する。13～20は須恵器坏蓋である。13・16の天井部内面は回転ナデ調整の後静止ナデで仕上げられる。19・20は天井部外面にヘラ記号を有する。21は須恵器壺である。第4図に図示したR2・R3も須恵器壺であったが、胴部のみしか遺存しないため、図示していない。22はR1で須恵器瓶。胴部下半から底部にかけてハケのような調整痕跡がのこる。23～25は土師器で、23・25は坏、24は鉢である。23の胎土は砂粒も含まれず精緻である。

(5) 古代の遺構と遺物

① 掘立柱建物

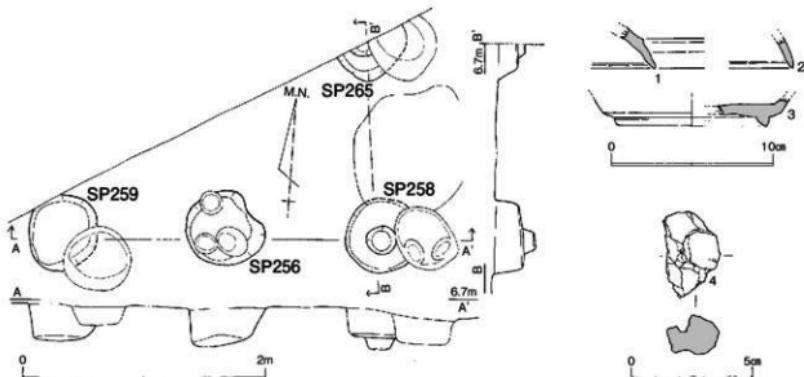
SB292（第26図・図版4-2）

調査区北端に位置する掘立柱建物である。北側が調査区外へと続くため、正確な規模は不明である。主軸をほぼ南北にとり、東西辺で2間以上、南北辺で1間以上を検出した。覆土はローム粒を含むしよりの強い暗褐色土である。平面で柱痕跡等を検出することはできなかったが、柱穴掘方底面にのこる圧痕から、柱の直径が0.2m程度であったと推測される。

柱穴は直径0.6m程度の不整形円形プランをなし、検出面から0.35m程度残存する。柱穴の底面の標高は6.3mでおおむねそろう。柱間距離は南北辺で1.28m～1.4mで、東西辺で1.6mをはかる。

〔出土遺物（第21図）〕

1・2はSP256から、3・4はSP265から出土した。1・2は須恵器坏蓋で6世紀後半のものである。3は須恵器の高台付き坏。4は鉄滓である。



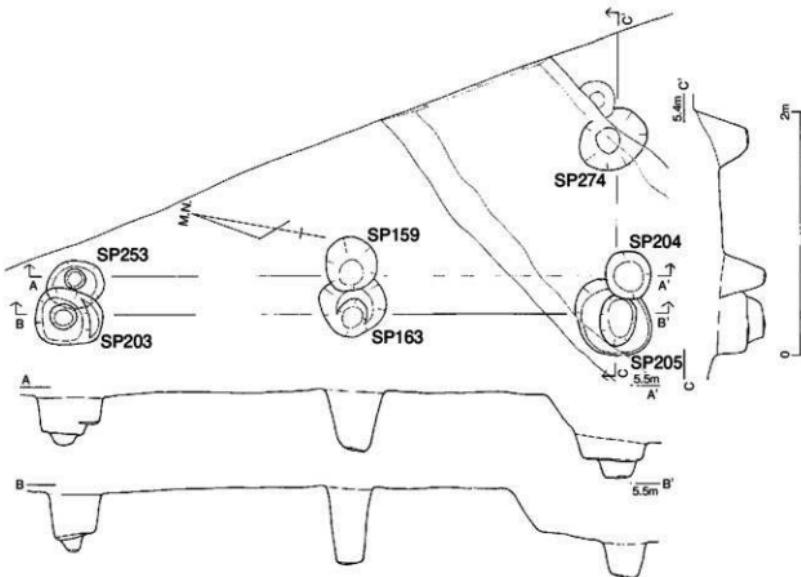
第26図 SB292実測図（S=1/40）・出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

### SB293 (第27図・図版4-3)

調査区東端に位置する掘立柱建物である。東側が調査区外へと続くため、正確な規模は不明である。主軸をやや西よりの南北方向にとり、南北辺で2間以上、東西辺で1間以上を検出した。柱穴は東西辺で切り合いが確認され、建て直しがあった可能性が高い。SP253・203の関係を調査時の誤認とすれば、北側柱穴SP159・204が南側のSP163・205よりも新しいことから、北側柱列が立て替え後ものであると考えられる。

柱穴は直径0.36m～0.55m程度の不整円形プランをなし、検出面から最大0.62m程度残存する。柱穴の底面の標高は4.7m～4.9mをはかる。柱間距離は南北辺で2.2m～2.4mで、東西辺で1.2m～1.5mである。柱穴の覆土はしまりの強い暗褐色土である。平面で柱痕跡等を検出することはできなかったが、柱穴掘方底面にのこる圧痕から、柱の直径が0.2m程度であったと推測される。

柱穴からは土師器・須恵器等が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。

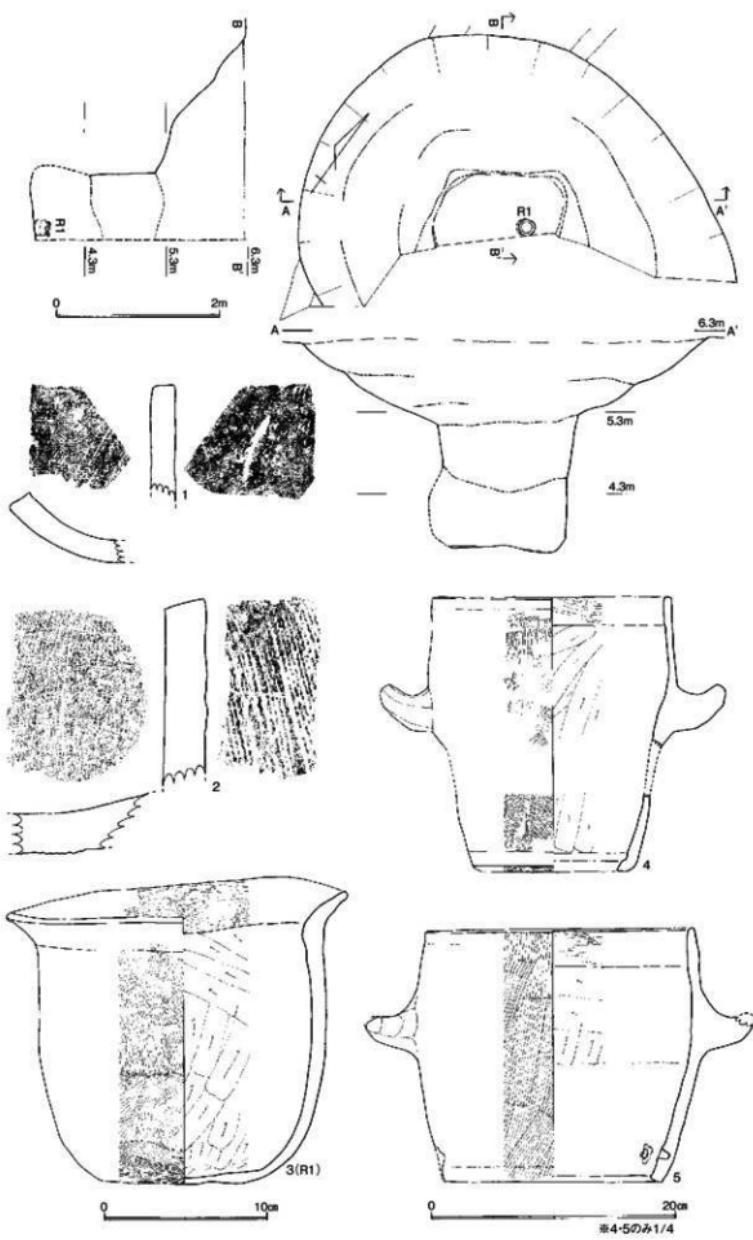


第27図 SB293実測図 (S=1/40)

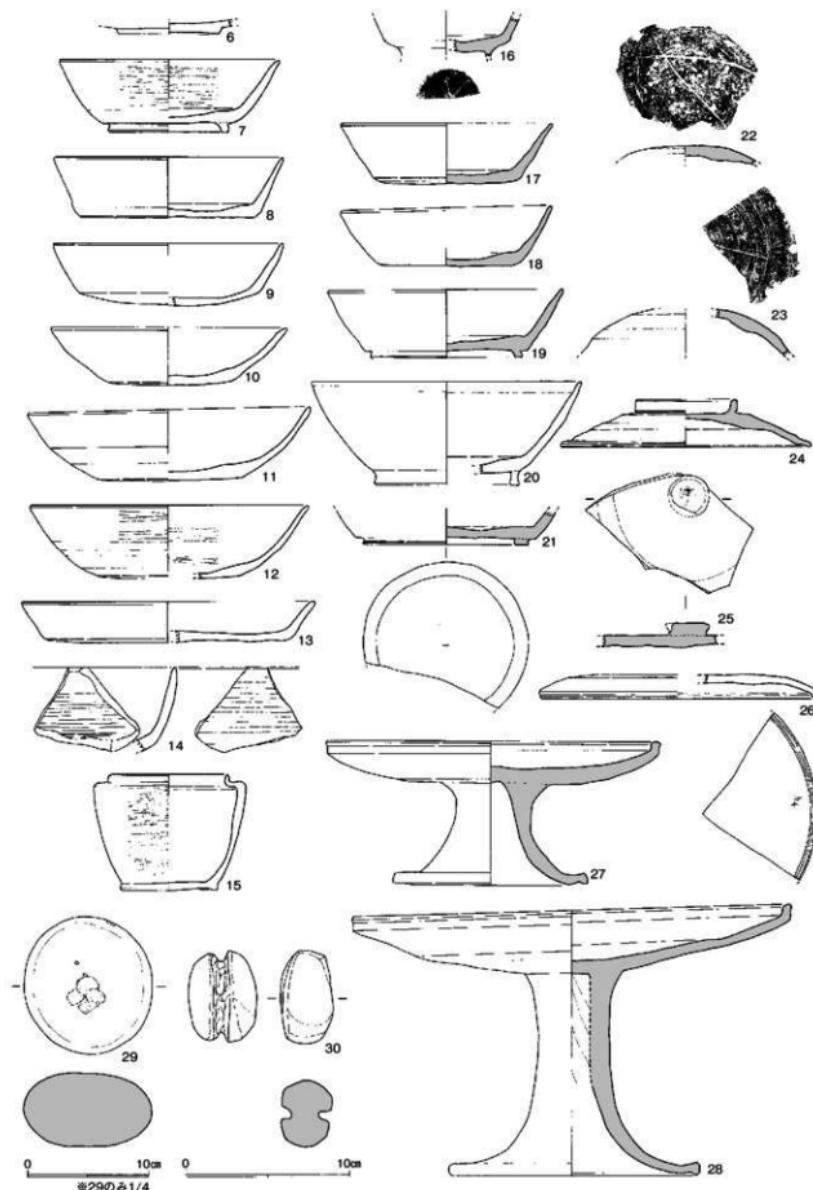
### ② 井戸

#### SE164 (第28図・図版2-2)

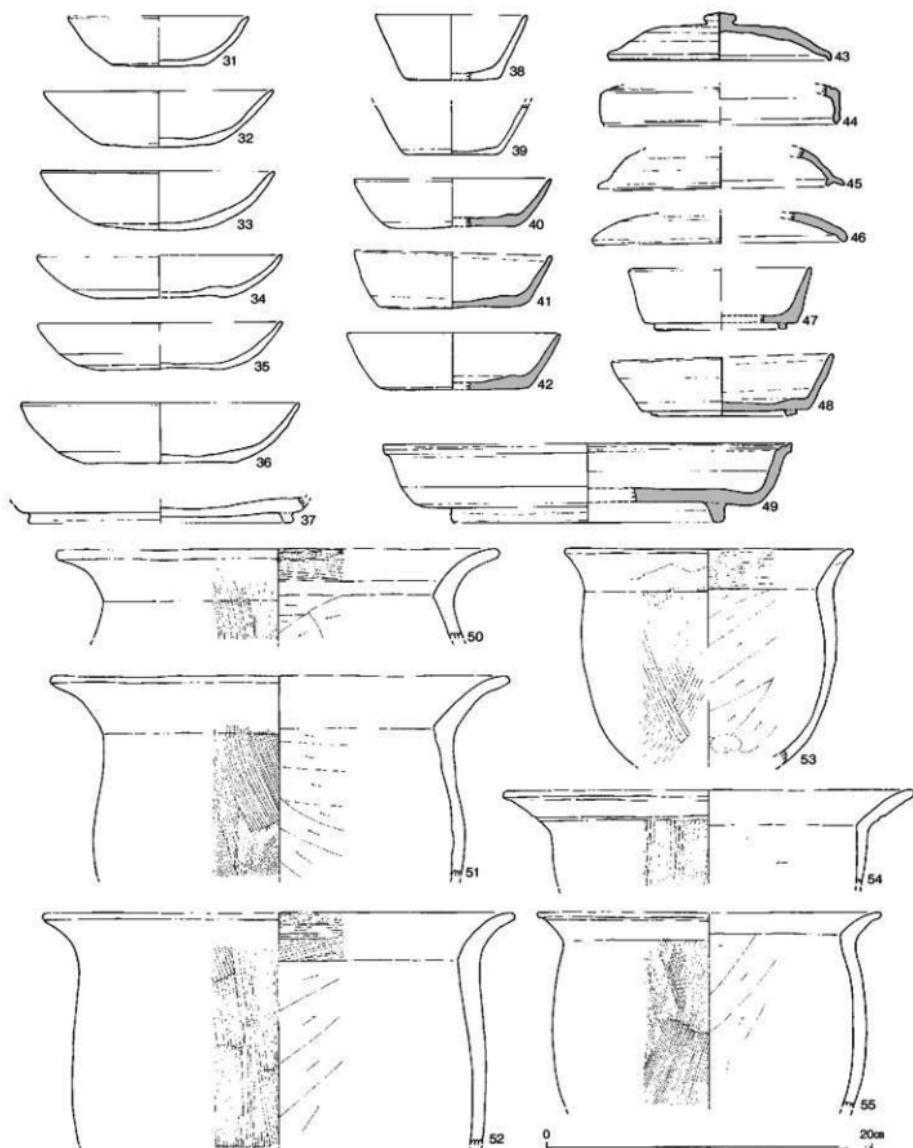
調査区南端中央部で検出した、平面円形の井戸である。SC166・SC167・SD162の廃絶後に掘削されている。南側は調査区外へと続く。検出面の標高は6.15mで、検出面から深さ25mで底となる。底面の標高は3.8mをはかる。SE164は、検出面では直径約5mの不整円形プランをなすが、検出面から0.9mの深さで一辺2.5m以上をはかる方形の堀方となる。掘削途中で井筒を検出できなかつたため、平面精査と調査区南壁の土層の検討を行つたが、井筒の痕跡等は確認できなかつた。



第28図 SE164実測図 (S=1/60)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)



第29図 SE164出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)



第30図 SE164出土遺物実測図 (S=1/3)

覆土は、砂礫を含む黒褐色粘質土および暗灰色粘質土を主体とし、底面近くでは地山ブロックを含み粘性が強くなる。検出面から1m付近では、豊穴住居に由来するとおもわれる白色粘土・焼土粒を多量に含む暗褐色土がみられ、廃絶された周辺住居からの流入土と考えられる。

出土遺物から8世紀末から9世紀初頭の井戸であると考えられる。

#### 【出土遺物（第28・29・30図・巻頭図版3）】

1・2は下層から出土した平瓦である。1の端部はヘラ切りされ、凸面はタタキの後ナデ消している。3の土師器甕は井戸の底面直上で出土したR1で、口縁の一部が失われているがほぼ完形である。周辺および内部から果実の種子も出土している。4・5は土師器甕である。5の甕の把手の下部には、それぞれ等間隔に3つ貫通しない孔が穿たれている。6は防長系綠釉陶器である。外面にわずかに釉が残る。7～15・20は土師器である。7の碗は、外面底部はヘラケズリ、他はヘラミガキされる。11・12・14の坏も、同様に調整されている。8・10の坏、11の皿の底部はヘラ切り調整。10の内面には漆のような黒色樹脂が付着している。16～19・21～28は須恵器。17・18・21の坏あるいは甕の底部はヘラ切り後ナデ調整で仕上げられる。22・23の坏蓋は外面天井部にヘラ記号を有する。24は蓋で、天井部内面は回転ナデ後静止ナデをほどこす。21・25・26の坏や蓋には「十」「中」等の墨書きがみられる。29は磨石。中央部はわずかに凹み、使用痕が観察できる。30は灰褐色を呈する土錘で、重量71.22gをはかる。31～39・50～55は土師器、40～49は須恵器である。31～36は坏。34・35・36の胴部下半から底部は回転ヘラケズリされる。35の内外面にはわずかに横ヘラミガキの痕跡がのこる。37は皿。38・39は器高の高い坏で、38の底部には回転ヘラケズリがみられる。50～55は甕。外面は下から上へ縱方向のハケ調整、内面は横または斜め方向のヘラケズリで仕上げられる。ほとんどの個体にスス・コゲが付着している。53の口縁部外面には粘土接合痕が観察できる。40～42は坏で底部はヘラ切りで切り離される。43・45・46は坏蓋、44は壺蓋である。47・48は碗、49は盤。47の底部にはヘラ切りの痕跡がのこり、49は胴部下半から底部まで回転ヘラケズリがほどこされる。

このほかにもひょうたんや動物骨片等の動植物遺存体も少量出土した。

#### （6）そのほかの出土遺物

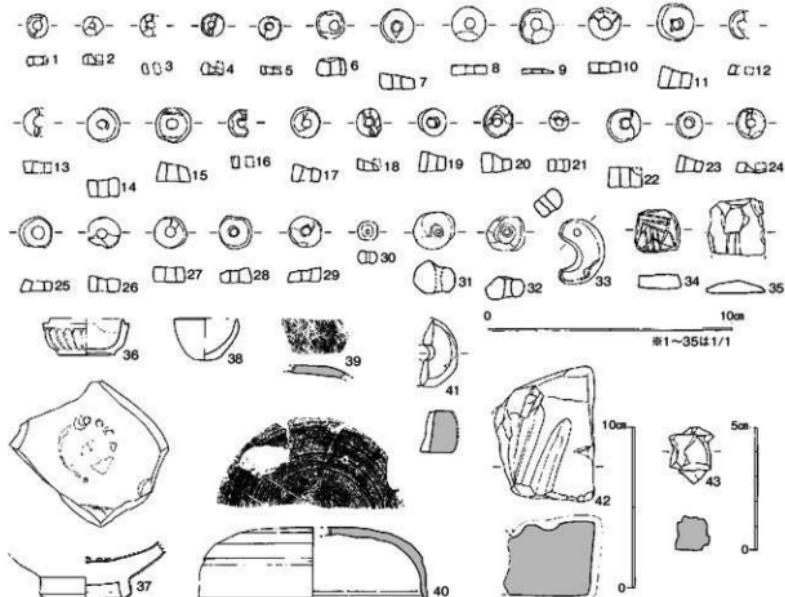
1～29は滑石製白玉で、30～32は土製玉。33は勾玉で、34・35は滑石片である。31と32は土錘の可能性も考えられる。それぞれ重量は3g、5.19gである。33は乳白色を呈する石材を用いている。

34・35は滑石製白玉の未製品か。1～35の出土遺構は下に示した。

36は青白磁合子、37は龍泉窯系青磁碗である。36はSP51、37はSP07から出土した。37の釉色は深緑色で、内面見込みには文様のようなものがみられる。38は遺構検出時に出土したミニチュアの手捏ね鉢。胎土には石英粒を少量含む。39・40は須恵器坏蓋で、天井部外面にヘラ記号を有する。39は遺構検出時に出土し、40はSP149から出土した。40の天井部内面には当て具痕がのこる。41は黒色を呈する土製轆轤車で、SP214から出土した。重量は24.9g。42はSP215から出土した砂岩製砥石。溝状の使用痕跡が残ることから玉砥石と考えられる。43はSP268から出土した鉄滓である。

第1表 玉類出土遺構一覧

1	SC96・98	8	SC128カマド	15	SP02	22	SP217	29	遺構検出
2	SC98	9	SC128カマド	16	SP02	23	SP229	30	SC128カマド
3	SC116	10	排土	17	SP05	24	SP254	31	SC97・127
4	SC116	11	SD150	18	SP40	25	SP256	32	SP119
5	SC116	12	SD150	19	SP46	26	SP256	33	遺構検出
6	SC127・148	13	SD162	20	SP115	27	SP259	34	SC127
7	SC128カマド	14	SD162	21	SP175	28	遺構検出	35	SC169



第31図 そのほかの出土遺物実測図 (S=1/1・1/2・1/3)

## 第4章 まとめ

本調査では、弥生時代後期前半から中世までの幅広い時期の生活遺構を、比較的の遺存状況の良い状態で、多数確認することができた。とくに、堅穴住居は、弥生時代終末期～前期と古墳時代後期の2時期に集中しており、那珂遺跡群全体の最盛期と重複する。これに対して、台地縁辺部から台地中央部への集落の進出が開始する弥生時代中期後半の遺構は、本調査地点周辺では少ない状況である（高位部の123次調査で壺棺墓群、低位部の93次調査・102次調査で土坑等）。本調査で得られた成果は、那珂遺跡群の集落の盛衰に沿った典型として位置づけられよう。

本調査で検出された遺構のなかでも、とくに注目されるのが、SD150・SD162・SD168である。これらの溝は、6世紀後半に廃絶された堅穴住居SC127・SC128・SC237等を破壊して掘削されており、3m～4mの距離を保ちながら平行して円弧を描いている。溝からはこれらの堅穴住居に由来する白色粘土や須恵器等が出土しており、溝として管理されていた期間が比較的短かった可能性が推測される。空塼であったことは確実で、古墳の周濠との指摘もうけたが、機能は不明である。

また、試掘調査の成果から、本調査地点のすぐ南側には御笠川の氾濫原から台地中央部にむかって谷が陥入するとされてきた。しかし、本調査地点では調査区の南端まで堅穴住居や井戸等の生活遺構が密集しており、古代以前は本調査地点の南側まで集落域が広がっていたことが推測される。

## 附論 那珂遺跡群第132次調査出土ガラス小玉について

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財センター 西澤 千絵里（当時）

ガラス小玉は12点出土しており、色調で淡緑色3点、青紺色7点、淡青色1点、黄色1点に分けることができる。これらのガラス小玉について埋蔵文化財センターで寸法の計測、実体顕微鏡観察による製作技法の調査と蛍光X線分析装置を使用した非破壊の定性分析による材質調査をおこなった（エダックス社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置Eagle  $\mu$  probe／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：20kV／電流値：510～740  $\mu$ A／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm  $\phi$ ／測定時間120秒）。

実体顕微鏡観察では、肉眼でとらえにくく遺物表面の劣化状況や内部の気泡、不純物の有無などが確認できるため、気泡の観察を中心におこない、ガラス小玉の製作技法の特定を試みた。その結果、資料のすべてに玉の孔に平行した気泡列や気泡筋、「触像」と呼ばれる気泡とその流れが風化して浸食された痕跡が観察できた。とくに気泡列が確認できる資料が多く、熔かしたガラスを引き伸ばして製作する引き伸ばし技法を採用して作られ、さらにその後資料を再加熱したものと思われる。

蛍光X線分析調査では、那珂132次調査出土ガラス小玉は総じてカリガラスやソーダ石灰ガラスのアルカリ珪酸塩ガラスであることが判明した。同系統の色調を呈するガラスでも材質が異なっていることや、ガラスの色調によって発色に関わる着色材に違いがあることが明らかになった。

以下に色調ごとの分析結果の概略を述べ、それぞれの寸法・重量の計測値、所見の一覧を付す。

### ① 淡緑色

透明度の高いものと半透明のものが見られ、前者はガラスの主成分のケイ素に次いでカリウムのピークが強く検出されている。また、銅のピークも強く検出されている点から銅を着色材としたカリガラスである。後者はナトリウムが検出され、さらにカリウムよりカルシウムのピークが強く、ソーダ石灰ガラスであった。鉄やマンガンのはか銅が検出され、銅を着色材としたと考える。

### ② 青紺色

青紺色ガラス小玉は資料によって透明度と色調に差がみられる。分析の結果、カリガラス製とソーダ石灰ガラス製の二種が存在することが分かった。カリガラスはケイ素やカリウムのほか、マンガンと鉄のピークも明瞭であるほか、コバルトも確認できた。淡緑色カリガラスは銅を着色材としていたが、青紺色カリガラスの場合、コバルトを着色材としているようである。ソーダ石灰ガラスは鉄やマンガン、コバルトのピークがみられるが、淡緑色ソーダ石灰ガラスのような明瞭な銅のピークは見られず、青紺色カリガラス同様にコバルトを着色材としたものと思われる。

### ③ 淡青色

小型で透明感が強い資料である。カリウムの反応が顕著でカリガラスと判断する。淡青色のカリガラスは銅を着色材として用いていることが明らかになっており、本資料についても銅のピークが明瞭である点から、銅を着色材として用いているようである。

### ④ 黄色

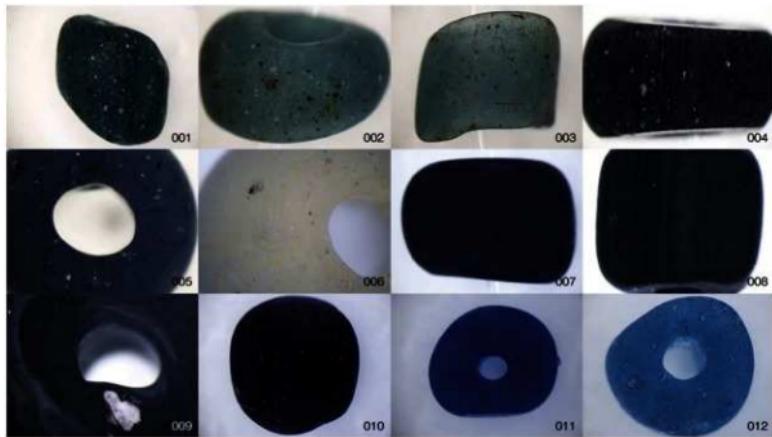
透明度が低い鮮やかな黄色の玉である。ナトリウムが微量ながら検出され、カルシウムのピークがカリウムよりも強く検出されている。多色のソーダ石灰ガラスに比較してアルミニウムの反応は強く、カルシウムの反応は若干弱いという違いがあり、高アルミナソーダ石灰ガラスと呼ばれるガ

ラスであった。青緑色、淡緑色のソーダ石灰ガラスと異なって鉛のピークが強いほか、若干であるが錫の反応がみられる点から鉛と錫を着色材として使用している可能性が考えられる。

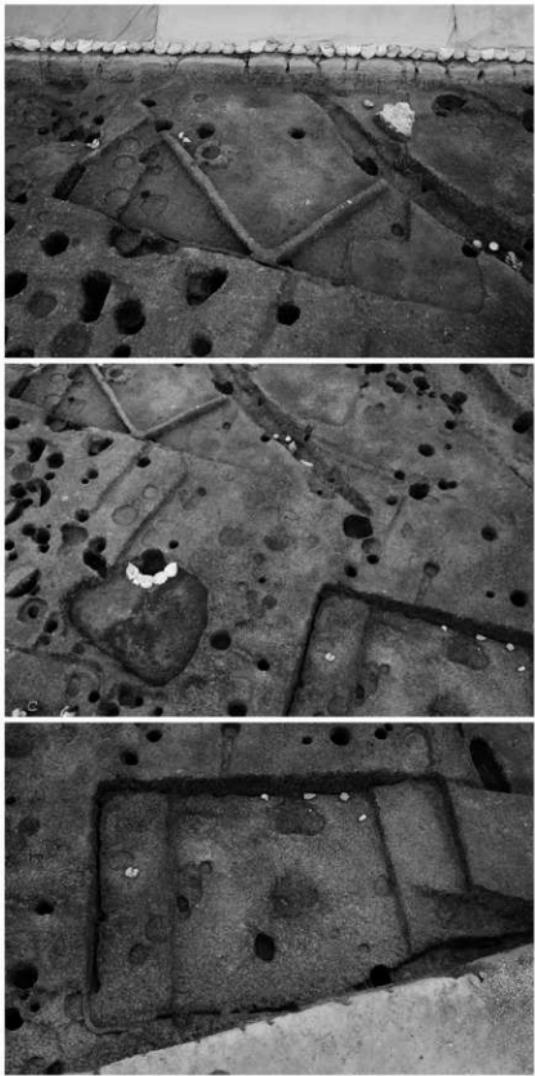
第2表 出土ガラス小玉一覧

番号	証記	色調	(mm)			(g) 重量	顕微鏡観察による所見	推定製作技法	材質
			径(幅)	長さ(厚)	孔径				
001	遺構検出	淡緑色	4.99	4.92~5.23	1.84	0.179	透明度高い。孔に平行した白色の気泡筋や気泡列がみられる。白色の混和物がみられる。	引き伸ばし技法	カリガラス
002	SD150 II区	淡緑色	4.97~5.58	2.22~3.11	2.06	0.098	透明度低い。表面に細かな傷あり。単独の気泡と孔に平行した気泡筋、気泡列がみられる。	引き伸ばし技法	低A I ソーダ石灰ガラス
003	SD150 II区	淡緑色	5.2	2.61~4.2	2.2	0.124	透明度低い。表面に細かな傷あり。単独の細かな気泡と、孔に平行した気泡筋がみられるが、気泡の間隔は広い。	引き伸ばし技法	低A I ソーダ石灰ガラス
004	SD150 II区	青緑色	6.19~7.3	3.65~4.53	2.25	0.274	白色の混和物有り。孔に平行した小さな気泡の列が多く観察できる。	引き伸ばし技法	カリガラス
005	SD150 II区	青緑色	5.84~6.33	3.56~4.31	2.13	0.21	透明度高い。白色の混和物有り。孔に平行した気泡筋がみられる。	引き伸ばし技法	カリガラス
006	SD150 II区	黄色	4.91~5.51	2.96~3.73	1.58	0.135	透明度低い。白・黒・褐色の混和物、濃い黄緑色の細かい粒子がみられる。孔に平行した気泡筋や斑状、細かな気泡がみられる。	引き伸ばし技法	高A I ソーダ石灰ガラス
007	SD150 II区	青緑色	7.98	5.17~5.62	2.05	0.53	孔に平行した気泡筋、気泡列が観察できる。気泡は小口側に多くみられる。気泡は細かい。	引き伸ばし技法	低A I ソーダ石灰ガラス
008	SD150 II区	青緑色	5.36	5.37~6.17	1.78	0.281	白色の混和物有り。側面に孔に平行した斑状と気泡筋がみられる。気泡はかなり少ない。	引き伸ばし技法	低A I ソーダ石灰ガラス
009	SD150 II区	青緑色	6.1~7.3	3.1~5.28	2.31	0.27	白色の混和物有り。側面に孔に平行した斑状と気泡筋がみられる。気泡はかなり少ない。	引き伸ばし技法	カリガラス
010	SD150 II区	青緑色	5~5.98	3.71~4.58	2.01	0.184	白色、半透明の混和物有り。細かな気泡と孔に平行した気泡筋がみられる。	引き伸ばし技法	カリガラス
011	SC169 南ベトナム 東端	青緑色	4.06~4.81	3.39	1.48	0.09	透明度高い。赤褐色の混和物あり。孔に平行した気泡筋と単独の気泡がみられる。	引き伸ばし技法	カリガラス
012	表採	淡青色	3.87~4.01	2.9	1.3	0.06	透明度高い。孔に平行する気泡筋と大きな気泡がみられる。	引き伸ばし技法	カリガラス

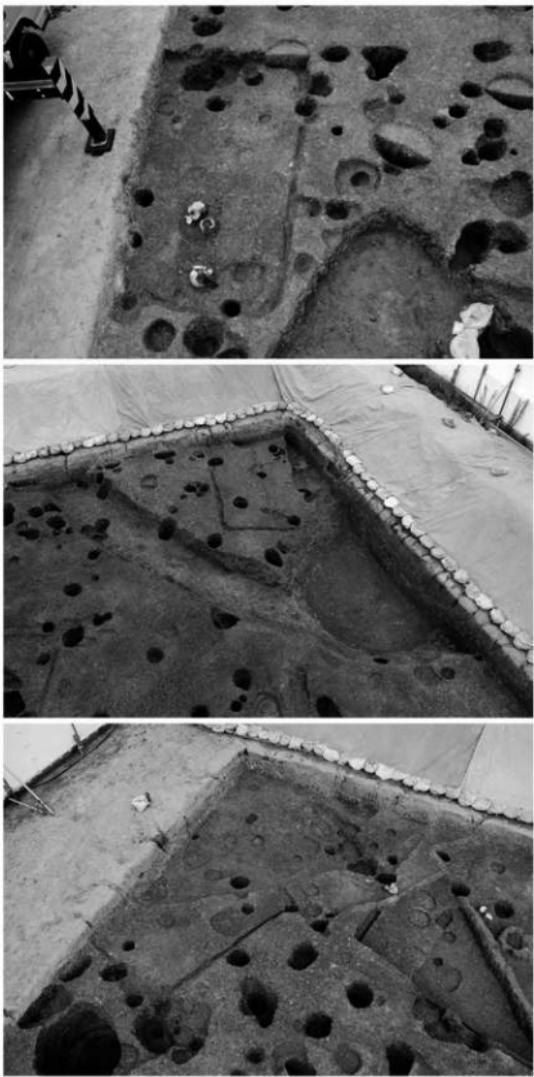
\*番号は巻頭カラー図版の番号に一致する



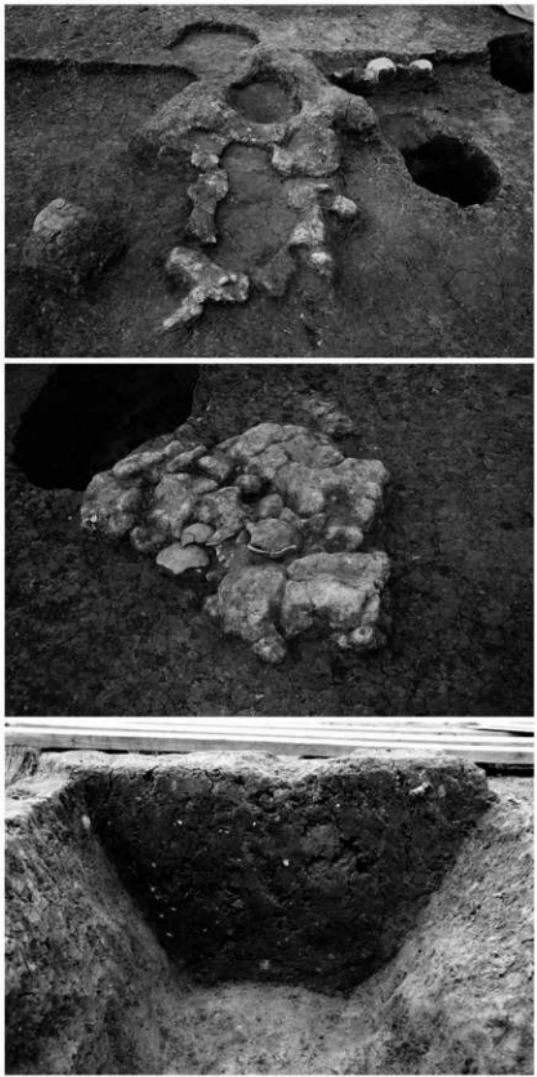
第32図 出土ガラス小玉顕微鏡写真（縮尺不同）（※番号は巻頭カラー図版の番号に一致する）



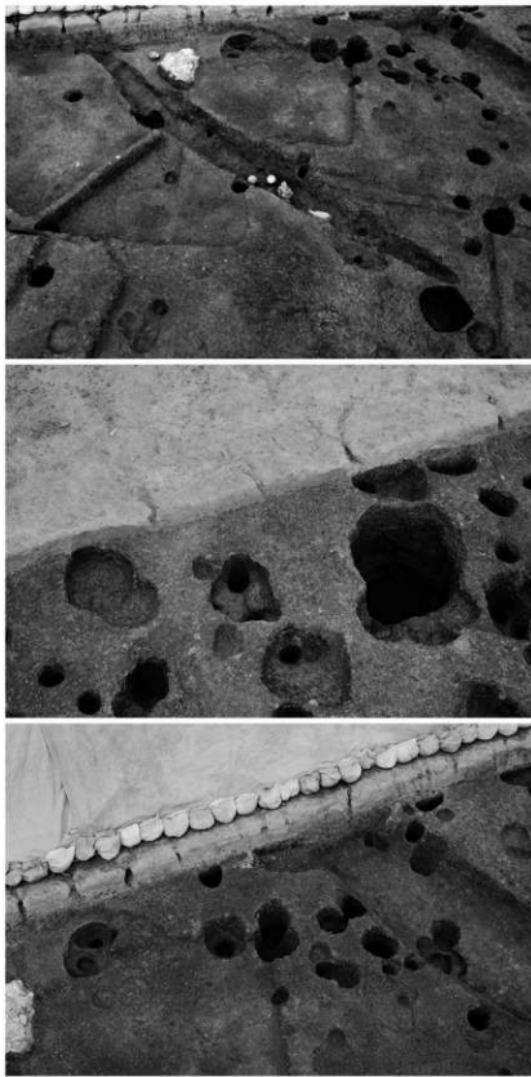
1. SC97・SC127 (西から)  
2. SC148 (南西から)  
3. SC169 (北西から)



1. SC165 (南から)  
2. SC167・SD162・SE164・SB291 (北西から)  
3. SC96・98・116・122 (南西から)



1. SC127カマド検出状況（南から）
2. SC127置き粘土検出状況（南東から）
3. SD150B-B'土層（北東から）



1. SC128・SD150 (西から)
2. SE113・SB292 (南西から)
3. SB293 (北西から)

## 報告書抄録

ふりがな	なかろくじゅうご							
書名	那珂65							
副書名	- 那珂遺跡群第132次調査の報告 -							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1192集							
編著者名	松尾奈緒子							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8番地1号 TEL092-711-4667							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかいせきぐん だいりやくさんじゆ にじちょうさ 那珂遺跡群 第132次調査	ふくおかはしかたくとう こうじまもいっちらうめ 福岡市博多区 東光寺町1丁目	40132	1126	33°57'60"	130°43'59"	20110704 ～ 20111007	255	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
那珂遺跡群 第132次調査	集落	弥生時代 古墳時代 古代	堅穴住居・井戸 掘立柱建物・柱穴・溝	弥生土器・土師器 須恵器・輸入陶磁器 石器・木器				
要約	<p>本調査地点は、那珂遺跡群の北部東端に位置し、御笠川の氾濫原から台地中央部へむかって陥入する谷部に南北を挟まれた結果、半島状となった高位部に立地している。筑紫通りを挟んで東側で、官道東門ルートを検出した102次調査、西側では、8世紀代の溝、古墳時代初頭の井戸等を検出した123次調査が行われている。</p> <p>本調査地点の現況は畑で、現地表面の標高は6.8m前後である。鳥居ローム遺構面の標高は6.3m～6.7mをはかり、北西から南東へゆるやかに傾斜している。鳥居ローム遺構面では、弥生時代後期前半の井戸1基、古墳時代初頭～前期・古墳時代後期を中心とする堅穴住居15基・掘立柱建物1棟、古墳時代後期の堅穴住居をさる平行溝2条、8世紀末の井戸1基、掘立柱建物3棟などのほかに、弥生時代～中世まで幅広い時期の柱穴や土坑などを、良好な遺存状況で多数検出した。</p> <p>とくに、堅穴住居は、古墳時代初頭～前期と古墳時代後期の2時期に集中しており、那珂遺跡群全体の最盛期と重複する。これに対して、台地縁辺部から台地中央部への集落の進出が開始する弥生時代中期後半の遺構は、本調査地点周辺では少ない状況である。本調査で得られた成果は、那珂遺跡群の集落の盛衰に沿った典型的として位置づけられよう。</p> <p>また、試掘調査の成果から、本調査地点のすぐ南側には御笠川の氾濫原から台地中央部にむかって谷が陥入するとされてきたが、本調査地点では調査区の南端まで堅穴住居や井戸等の生活遺構が密集しており、古代以前は本調査地点の南側まで集落域が広がっていたことが推測される。</p>							

## 那珂65

－ 那珂遺跡群第132次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1192集

2013年3月22日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
電話 092-711-4667

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社  
福岡市東区松田3-9-32  
電話 092-621-8711